

武徳集覽

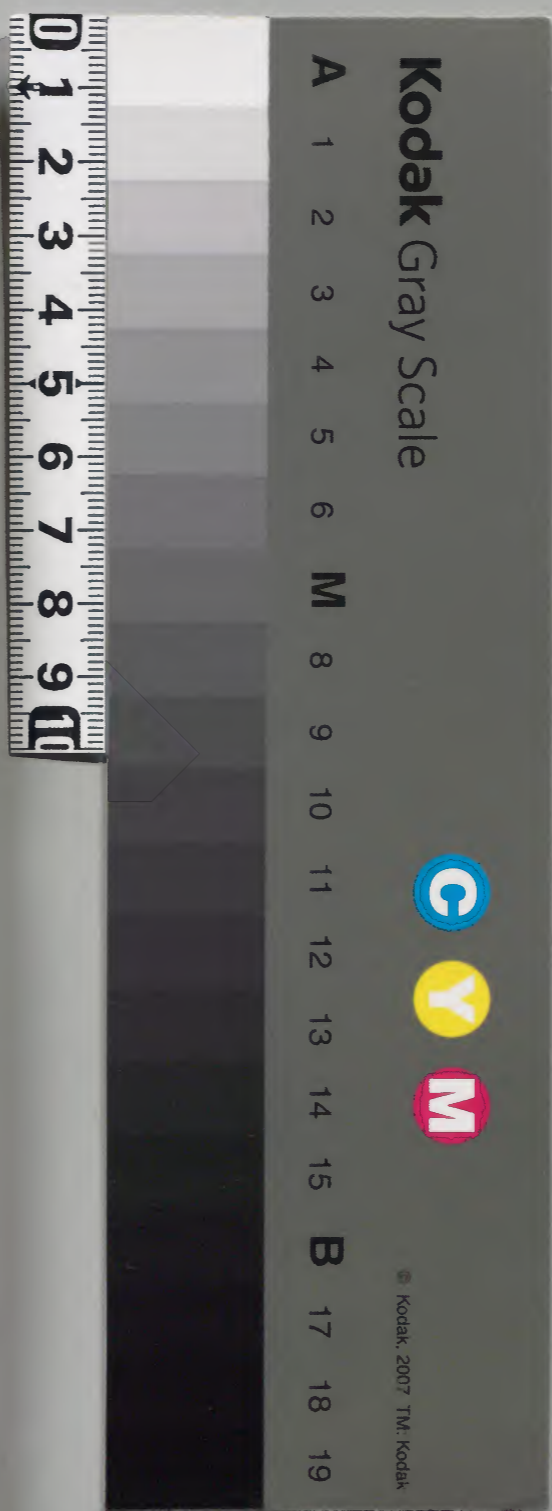
慶長十九年

自十月
至十一月

七

庫	文	閣	内
五	九		和
〇	七		書
函	七		
	一		
四	〇		
架	冊	號	類

内閣文庫	
番號	和 15775
冊數	10 (7)
函號	150



武徳集覽卷之十七

長十九年十月朔日

板金勝色仔細告白秀於欲錄片桐而作礼。公以
在于江户下令於信國曰奈去而討之。

是心洋書に在る板金勝色を考ふるに方より此物と云ふ殿所之言に母板金勝色ありと記○永井忠孝記○考へ通鑑

改革録云互府幕侯達伯摩下士林悉登城

汗湯車致目板金勝色仔細告白秀於欲錄片桐而作礼

其本自於大坂大野修理青木氏助石川伴直

薄田隼人渡辺右衛門佐木村長の与織田の

外十余輩秀於依作片桐市心の為教市心

淺草文庫

和實紀調所

知く用意私宅と善ましく此中上野介板倉
内膳公言と因く御主殿是太坂御出馬と
至江付勢兵衛尾張三河遠江被仰觸又千
江戸幕府被仰是 ○板倉

廿日序相退太坂入落木城 御年簿○武佐大威記○所
井其名記○海○集威○等名
日記○板倉

幕府日記、廿日序相東市正因姓主膳正
正且之 信若と年々々々太坂と退と落木の古畧
上入太坂宅地とあるの時大野修理亮の嫡子
信清とと東市正の長子と云々と云々と云と



質と取りし太坂七組と家名と送御殿の
過小しと質と返して退子去是と云と大野
修理亮除権と執○金葉紀考云ハ太坂人質大野修理亮子
信清織田有長子武蔵なりと云り以
御免交りして御殿とは能觀世と云と御免
紀修殿水戸殿御雅と時分と能はぬと云と
御人々今御免と云と兼、今度と御新中
一と云と兼と云と兼也御表へ出御江戸
の如くと云と兼御沙礼御通を仕へる御免
と云と兼御沙礼御通を仕へる御免
御免交御免と云と兼御免と云と兼御免と云と兼

右(左)と申すは御侍の玉氣し今般と書は板友と書は
乾し御能は初とてこのいぬとるは左右下
しとては御おし乗上り為入しそを以ては
山奥し山度安ら為入別廊下と銀肉とるを以
ては然れど宣時分は後系取は御御と書は
本多と野介被廊下道お城の所最早乗上
は為入し板御書はとて我おあらやとて後系取
飛御致お事は色し御用とるは書つては上
中達山を別出御書状を御被後出はとる
お御とる、その時松平右衛門と書は板友乾しとる

御能初とて中へ御とお何の如何とて
未あうと方とハ陣う有そととて意は板友とる
也依し御能と
村神定去○流士軍流ハ横江橋ハ
内源始ハ候なれハ朝ハ西程流とて
なりとハ表ハ御何御ハ西程流ハ御何御ハ
交しと方とる御御お事とハ西程流ハ御何御ハ
海に集成

十月十一日とる駿府御出陣とて御能とる
その用とてはとる御能とる御能とる御能とる
河茂承山御能とる御能とる御能とる御能とる
翌日御能とる御能とる御能とる御能とる御能とる
英流とる松平下流とる水野日向とる御能とる

本陣に利意仕東より本陣浦島津以
御先達より系し此乃中筋之城主と爲主
中筋是より先達より波と系し此乃御先
村城名若○是元捨遣

中國西國節々大名名々本陣に用意仕東
本陣は右左次方小の々本陣に用意仕東
村城名七

尾久長車々^十本陣に用意仕東近ハ本陣に
此利意仕東の々本陣に用意仕東
紀伊本宣々^十本陣に用意仕東

水戸殿^十本陣に用意仕東
村城名七

本陣に用意仕東
本陣に用意仕東
本陣に用意仕東
本陣に用意仕東
本陣に用意仕東
本陣に用意仕東
本陣に用意仕東
本陣に用意仕東
本陣に用意仕東
本陣に用意仕東

有しんちんしん長は供仕はるるに思及る如
幸し候し友押る所よりは為る人教の團
残量と七騎百連いりしに思及る
秀也の孫山若堂より事いふるに長は供仕はるるに
入御旗本に二の孫をいりしに思及る也 村越をい
松平保直も信長松平徳政も定行井伊掃部頭
直孝渡辺山城守と板倉勝重と候して謀る
とくく板の密計とひやくし先駿府及び戸
小吉の 秀也日記の武徳大成記見るとい
保科肥後守正光 命と奉るは定の城と云は清

正光後小依竹美室より秀也日記
後陳今初の世とも

二日

御表に出御時夜は念と成る中節二里
飛御中付をいりて候し大坂にいたるは
とくく上野介に候付く世内とて遊く大坂
とく右言来りし也因於此候るるに日野
大初と成る若居助始侍長光を外帯に候
とく此は種くは候るに候るに夜雷鳴
三交也御が陣前へ雷鳴事長事也と
とく思及るに上意也侍長老と雷の國

京野發吉事、江山活山の...勝利あり

相遠る有りさし...村越之云

不支上野介...村越之云

の...村越之云

可中...村越之云

東十一日...村越之云

...村越之云

...村越之云

...村越之云

不自火也...村越之云

整令...村越之云

左命...村越之云

内...村越之云

内...村越之云

秀...村越之云

...村越之云

依...村越之云

...村越之云

为...村越之云

浪人多集り事攻人と候す由上三 祐徳刑部左衛門守亮八大坂へ僅
又里史固倫一として大野を侵ると作すに由使として
茂本一と記すに日と云ふ水一海軍集威勢なり見記同一云々通艦
用と云ふと記す長見記一坂見記一創業紀考云

松平掃部忠政奥平信昌 卒 三十一 茂本見記一高橋
又歳 語一云々見記

片桐大坂と退く後秀頼商人運送く去根
と城へ入せし久大満船場乃枝木と以城壁
と候し溝渥と深くく云と集く也防戦の
得となり板金勝を徳國の云根運送と停
止は世古東國收納の云根大坂へ云舟す
秀頼告云とく是と云らしし是も依と
大坂と云船す、事とひす勝を云云

使と大野修理亮り方小きり、謂て云秀頼去
と揚人と信を云云あり事、去根と
以軍利の資となすし、い海軍の多と云大坂
城壁修理未成云と集、事不足なる、乃間
智閑承乃云、と云、即日世去根と船へ移て
依ん小送る茂本見記一武徳大成見記一海軍集威勢月日と記す
長見記一坂見記

三日

賜川雨、幕及白旗於寧我、屯明日之尾、及而
發云
御奉唐一○茂本見記一○創業紀考云一○武徳大成見記一と云々見記一○茂
本見記一○海軍集威勢一○永井若君見記一○云々通艦一○云々之拾遺
於宣旨、白旗、中尾、幕、と所志、下、祐下、創業紀
考云一

武徳大成化日と云記○舊物語村定々白旗天竺神徳の奉終り大正
西く大正の海軍集威

廿日正作出の當時在府乃大小名と記あり
来十一日富城沖動なす一舟一舟供奉し用意
至油の波急なり又左國の案八日栞と
伺ひ路次ふか途ひ出供下致はと作舟者
あく後乃中出控并出行列の目録と作舟
既景了及んく要平史代与伝昌と百て出
ぬちの次方と正作舟左の中書舟ハ右平史
みた馬の認く 変え拾遺

三呂西尾乃城と云多陸殿今廢後云と卒て

江呂小越と云脂亦乃城と加ふすく云く老臣在云

と云と云 海軍集威

巳日

大樹命徳及く牧日名攻玉整軍用而發云 年 佛

傳○劍業紀考云三には平家傳の上云云云云と陸軍意任一は大次
舟大次表下令急陣は有命と云云云云と云○武徳大成化日と云記
○武徳大成化日 台傳後及徳大次令と下云いには府のる恒威能事
る西國の徳大名各團の攻軍の用意と云云云云と云云云云と云云云
と云云云と云云云と云云云と云云云と云云云と云云云と云云云
形と意と團とと攻城後と田の石恒と成就と云云云云と云云云
國とと攻軍の用意と云云云と云云云と云云云と云云云と云云云
云云云通世○云云云拾遺○云云云

奥州関東中く自江平有陣觸 劍業紀考云○
年集威○云云云日記○云云云通世

右云馬場之駿府被赴尾良 劍業記所云〇海子集
支度のもなりと記〇若くは通艦〇若くは拾遺〇若くは日記〇改日記

尾良乃輔長威成年人正正威ハ政次中兵衛

小波くと系一戦場ふくハ 神若の魔下リ

互く徳軍の節制と施すハ 海子集

市代友量時佐右衛門右衛門大徳大石十右衛門大徳

船乗と懸あハ 海子集

武江ふ於 右徳云阿倍四郎お希正之と云て留

肥後乃監察侵と命す 共川口長三郎武

永田勝左衛門政次と遣ふ 海子集

軍令と徳隊へ施す 海子集

六日

京致板倉守屋も我御新集大坂の旗立徳城

郭徳軍人抱居量謀支度 海子集

海子集 郭徳軍人抱居量謀支度 海子集

板倉守屋も信人正改 海子集

設本村惣右衛門河村与惣右衛門と云共共徳の関

市と友場 海子集

と連夜中一関新と破り大坂へ通りけり

本村河村八幡堤より進を源左馬と討取て
侍等より進進を侍等より 神考の中上げ魚
冬原吉田山より攻下てお初よりと仰あり是
より大坂へ武奥運送の事より書船より侍等
武徳大成記○海○其成本村より右馬河村より右馬と記すの事なり

六日

系功飛御初事自織田有系侍等より方へ一通り
書状遣へ云今夜大坂雜況より系功正殿に侍
悪友は良秀親は折檻より市正殿方へ主殿
攝津棟木領 立除信より大坂以外騷動我亦

今對面所不野心矣亦亦此言互乎被中地漏○
武徳大成記○と云々

今日自江戶御書傳隙明細川内紀忠利系府
以上野介云と云々乃大坂騷動より後若根
より始義一團之又城中よりより果
与所不何御供也若仕大坂先より可被仰付也
中上知仰云云神妙也此系御感又江戶小赴
政子端○海○其成

中川内膳正自江戶御書傳隙明系府出所前
早々赴是後備人数自是江進可お侍より

被作の海子集

今日更濃加納の飛御到身中云松平傍侍与
去部の俄病翌二日午刻死去の上野成上
加納人数舍才幾の以惠山城主松平下侍与
石連大坂下系向也被作の又更作与定之為
愁傷加納城能下抄也被作の海子集

七日

京極丹後与因若校与右高表右之上也改因申
飛後与江户御書傳跡由出被下系若若
御國の作云急由五人數催の亦抄得也右右与

被作の海子集或世故因申飛後与の及之初中云西云
義の海子集と云云

今日片桐市正同主膳使志小嶋勝云城林侍志介
来て云大坂赫木と云云退の以不交上野介
言上更使被下也御殿御侍織陣領被也御書
之飯曰今夜侍人族程々依致中更赫木と云
立退由被思の於神妙如也攝の不交上野介下
中也因在之船同前被也御書与書共御書判
也の海子集

松平紀伊与三宅惣右衛門駿府御殿与也

依可被作舟自二尺被石浮豆亦く漬西國方
亦船方く色相改櫓取可く方産坂九を悟被
作舟浪津水書長野九を舟の因獄川舟作を悟
中舟以方九を悟奉く
舟の船〇考え拾遺〇故り九

編年集成云互以而くの湊く西國方の亦船
志津くく淹ぬすり早く是を改を稱取上
舟とる駁舟の町司産坂九を悟考え亦命せ
ら亦且東海東山の徳及を要路よ衛云と
並関東舟りの下条を忘八み考りよ通す
となるる下とと教令あり

福清在舟の事玉田茂亦加友たると舟是二人

江天小被残劍書に考吳〇海も集成より〇考え拾遺〇考
長り〇故り記す

編年集成云玉田茂亦長改加友たると舟

谷知舟の衛友と福考ると考く東武よ舟と

舟とと亦友正純より考考とと次時車并

平野遠は亦長泰ハ浩大閣秀吉恩顧の考故

如斯と云ら折長平野ハ駁舟く亦く東武よ下

舟と命と考考亦と考子大故亦亦亦ハ思許と

舟と馳と亦亦亦亦亦とととととととと

祚若より永井由勝舟長光と以類よ教訓と

加くら登き止ことなり細川内記ハ一旦白府
討り 古徳公の御方と仰ひ御至すこと
命と文て頼と揚んとしけり平野遠しと
芝蘭の反きと依く猶又長泰よ吳とを
東武へ携へ往くは密方と教ふ志は利
平野り定ふとく利害と詳し説おれ遠
と彼雄兵小の解と遂ふ武湯と却り高岳
す（子も領事と） （つらと）

後頼誘ふ 大寺本竹中伊豆を主利と
福富正則とえふ使して仰下され
世友大坂の軍起りしと秀教もいも是は
よれハ元とく小織田（本）大野本村渡辺と
計ひ小こそあも毎おれ折正則えより板
人図の也りし付く秀教もあし
又家康又あしをいしは正則り
又小取くハ何もの方小組とんと思ひ
正則假我又子よくみぬとも味方の疑ひ
なしとあしとん共すくく正則美
小とあしと息男信長も軍勢付く
系すす毎とものとなり

○政事録竹中伊豆と申す
信長は自ら平定府員也

作云由福宮大寺の寺正の男が初着のる為所使下格下下三下月八日は
○武佐大城江目上目と云ふ事以○其父拾遺八日と云○海子集成人男同
六の上記

中使昔山栗又市力及八勇功の譽ある故に子
依の息縁あり且高村房良の左衛尉藤田能也言
伝吉毛と云れり上杉家より於流武の稱ある
故是を古くお政と相成り〜監軍を多くと
名所後と云ふ 海子集成人

此日河陽より於河内代板合勝を多と云ふ
其穀津赤高男のり停止且河村高直の船
渡大高木村信右衛門河村又右衛門 保を勝を

堤士と友源左衛門の山と橋と此社野八宿右衛門
山と左衛門田上左衛門以下お子野といふ事と云
海子集成人

八日

在明夜堂和泉寺為先陣大和辺と相詰責は
天皇の表記侍員濃尾張侍勢遠江冬河流人
数一手可向い被作付 海子集成人和の國士は
今日自 幕下沙使と并大款介系藤今夜
付大飯と儀 大所不被 河馬と被作付
幕下 大所不被 河馬と被作付

言上し如作曰先河上流大坂之辨被成河院為指
及於今して河上流被作舟下り還河若於大坂
関麓城に被作 幕府大坂城可被賣也

大津下上以十万人數關東奥良以下河上流下被
作舟大坂介被合又人数引率於下有河上流

しに被作合は下河上流為下河上流越後少物
大津浦生下野さちわ 上河下 奥平上船亮

河上 最上駿河と親なる者大亮酒井河内と
同故後ち利内友若枝と以下出為者被被定

最上は大坂介幕作急為河上 河上 海○海○幕成
○今も拾遺の故也

七と記の式法上成元日と云ふ

遠及を川の城之松平河内と定行なる者被定
あり又院被さ定勝と云ふ被城と云ふ被の

田城と云ふ被さ定命あり 海○幕成○式
法上成元日と云ふ

故并停云被さ捕直改り二男掃部政直孝直時
大津普政と云ふ被さ定勤と云ふ被定右と

左史直勝病身なり是代と云ふ被さ定
直勝の但の士と云ふ被定
海内山城と云ふ被定 幕府の城之なる者被定

右政同年八月廿日河上流院の御人と相と云
先流と勤むは下河上流院老申の事と云

海子集或○武任大成記○海子

少約於房時移子代六駿府乃城乃城

也中心使前古伝在課役止二宅批後古房伝

同大厩亮康成古由傳之勤武任大成

團関市在善元

甲辰府中在善源信因情古長武任大成記○海子

駿只沼傳在善後多因榎長武任大成記○海子

信只松不在善忠系之初補秀故武任大成海子集

信只本在善関和友武任大成記○海子集

武任大成子持在善武任大成右日○右日○武任大成

知久在善武任大成右日○右日○武任大成

武任大成武任大成右日○海子集

井侍在善武任大成海子集

唯氷山言不在善西君杖武任大成記○海子集

房只押在善武任大成海子集

相只小田不在善武任大成海子集

相只若根不在善武任大成海子集

武只只小佛不在善武任大成海子集

相只二清不在善武任大成海子集

同新九郎在善武任大成海子集

駿及之能正書之野丹波守宗成 宗元拾遺○海○集成

遠及之能正書松平吉良以法昌 宗元拾遺○武徳大成○海○集成

三良名流正書小桑初相武成 宗元拾遺○海○集成

戸田左依子武成 口○口右

尾山公正書三宅勘右衛門康久 宗元拾遺○海○集成

水谷信親力与福隆 宗元拾遺○海○集成

遠心之能正書友成 宗元拾遺○武徳大成

江戶老根正書松平初信 宗元拾遺○海○集成

同依和心正書小之丞若根与政信 宗元拾遺○海○集成

同依和心正書戸田左(武成) 宗元拾遺○武徳大成

同依和心正書戸田左(武成) 宗元拾遺○武徳大成

江戶長濱城正書内友成 宗元拾遺○武徳大成

武徳大成正書向井玄康 宗元拾遺○武徳大成

編者集成云甲良平剛の圖とハ渡辺因頼 宗元拾遺○武徳大成

肥前大宰の地ハ那蘇宗の今ハ諸居守 宗元拾遺○武徳大成

左馬の依康純云と卒 宗元拾遺○武徳大成

山納大 宗元拾遺○武徳大成

伊予一帖八人 宗元拾遺○武徳大成

關東正代友成 宗元拾遺○武徳大成

關東正代友成 宗元拾遺○武徳大成

引絶其根、亦動命、平九条一死、平九条一死

上言、出代友政、味有九条、平九条一死、乃格修補

く、元軍勢宿刻、平九条一死、町人百姓、平九条一死、平九条一死

と命をり、平九条一死、而白駿府と立、平九条一死、平九条一死

九日

最上駿河占駿府、平九条一死、今日御目、平九条一死、又右羽去去月

十八日死去、平九条一死、御礼浪、平九条一死、平九条一死、平九条一死

手挺御鳥、平九条一死、平九条一死、平九条一死、平九条一死

千鳥服、平九条一死、平九条一死、平九条一死、平九条一死

大坂御鳥、平九条一死、平九条一死、平九条一死、平九条一死

御後赴江戸 平九条一死

十日

淺野但馬守長晟、平九条一死、平九条一死、平九条一死

阿波守玉蔭、平九条一死、平九条一死、平九条一死

但馬守毛利修親、平九条一死、平九条一死、平九条一死

御目、平九条一死、平九条一死、平九条一死、平九条一死

馳系、平九条一死、平九条一死、平九条一死、平九条一死

平九条一死、平九条一死、平九条一死、平九条一死

墨見、平九条一死、平九条一死、平九条一死、平九条一死

被仰、平九条一死、平九条一死、平九条一死、平九条一死

お伊達公之湯殿は如御機嫌宜也本多
上野介と為 正令く瓢箪、令く昇連く御
小馬平針此物とて一つあり御名手とあり打立
今晚田中へ下系御出立と立止りて御供行列
押お紀伊殿を跡より此押安房帯の可成供
此湯野の供と云用し此は作か 家康様と
持船（此を）湯野野と奉田中へ湯急この
成此は御お駿府御進条也上方より右へ通
本はては小馬平此立止りて此供と云と也
家康様へ眼より上御湯野なりと見聆りり

御宿陣へ湯急也

村被之云

大御馬平令く扇御旗より先上行小御馬平
浪く半月 將軍御儀の時竹大御馬平茂
秀お極く此御高は此山 村被之云

御行列 才一御鉄炮二百挺七百廿人
合九百廿人此是輕也 才二御弓並百張人数皆
口槍人此少人六十人合人数二百廿人同
才三長柄太刀御人数二百人此少人二百人合
九百人 才四騎馬四百人人数は百人此少
与力也 才五歩行与力七百二十人此少人

領り才六 手楮百帖持箱百帖取合手百人
此小人持り 才七 此使者廿一人 才八
此旗本之朋勢之小人 才九 此小姓組之下百人
才十 馬守り之下百人 此次此者役人 才十一
才十二 才十三 才十四 才十五 才十六 才十七 才十八 才十九 才二十
才二十一 才二十二 才二十三 才二十四 才二十五 才二十六 才二十七 才二十八 才二十九 才三十

才十三 殿下六段水野海邊与松平初重与安藤
常日二浦長門与山口駿河与永井右近与安右
人取之小人 此方決絶此長柄亦て松平右近与
是之司之取合本初の小人 数才方三子余組
此者役人 才十四 才十五 才十六 才十七 才十八 才十九 才二十
才二十一 才二十二 才二十三 才二十四 才二十五 才二十六 才二十七 才二十八 才二十九 才三十
才三十一 才三十二 才三十三 才三十四 才三十五 才三十六 才三十七 才三十八 才三十九 才四十

主膳正別不軍平高木菅七平高力河内也
長野子行 高木助次郎石谷友し柳石谷友也
石井元次郎日根左系柳氏左系増元高平次
朝倉勘左郎物本根七次郎阿部次郎吉加納
九十市山形仕貞二春使中三三春城援也
伊豆也 後代作 依久百伊也也 後代作 越前元主球正
野々村三平高小栗勘十郎 後代作 徳山本系系三平
十倉右田橋六太右曹政水野使後也分長松平
石人高康安松平お雲高勝徳 海子集 吉分徳氏
永井右全高史重勝西尾丹後也右永佛旗也

高田三平史安佐保坂合春也 清隆也久久保
彦左也 七敷若林和泉也重分一徳八平田七内
夏八伊東右也元小栗又市右政 海子集 志田
源政与信昌 海子集 横田甚右也 平松 貞上
初麻伝右也 昌久城和泉也昌茂 海子集 出使也
山本新左也 主成 海子集 股越権也 政元
海子集 政元作 高山次右也 主成 隆本也左也 伊也
海子集 集成也 伊也 作 一正百史権也
元也 海子集 伊也 作 本多友也 宗盛 海子集 清水
権也 長政 海子集 系田友也 権也 山城

高内少捕也海子集成山傳書 能川豐ふりた心

見一平合丹後与信地山豊信子以依友後何与

建威村田権左半海子集成山傳書 由良破河与村田権右也 同

行加丸甚十帝後氏也 右純花井左也定昌

豊清主膳信後後刑戸 日下秋太帝八宗好後大陽与

牧野信吉右系出信氏組二十人松平豊美也

勝政阿松左与外西吉松平忠康与定也松平

右了介市次三井左也依左也信与改丸右也

出持箇中根左也海子集成山傳書 信物改呼内也也也

新定信成七帝系定秋日向吉就改成後也

赤之助勝布施孫云信重豊清田信左也也也

山忌身外秋浦市右也系田也 希左也定加原

七百去依右也大申也 信自付和田云也也也

高合山平次与次河源信安友對与与也也

出源張本与依信与組本与大陽与也也

左与和監之也主膳正海田大也松平

出云友田能也与信右也也也也也

芦田元武川元津令元秋元也也也也也

信地与依信也也也也也也也也也

也海子集成山傳書 也也也也也也也也也

也海子集成山傳書 也也也也也也也也也

中物成辰列御あり年及常り水野討ちあり
數百騎に別 大所下所動を以て依
所奪野法軍勢自午別奪と 大所下
に百七十騎を多上野介下知申別因申下所
以り所○武徳大成記云 神若旗不しと云ふ百騎と稱し
駿府奪りしを多上野介に代へしと云ふ○海○集
天於川舟橋成就と云ふ故九云信日御が渡り
始りしよりハ行旅と禁す處とやと云ふは
神若宣ふハ舟橋ハ行人と云ふをり禁處と
多ふありは云ふも稱り渡りしより被斬
命と云ふ道と渡りしより命と云ふ

海子集

板倉侍あり飛脚に來た板舩津着城支度
を題ハ金銀多取か大坂と迫ハ本買込具
以下城中入在也構壁と付番匠數百人
櫓井菴と支度しと 此の條○武徳大成記○也見
本支度法あり素名が陳侍能元因あり 創業
是○奪ちりた○武徳大成記云 此の條の條伊能給よりまわして
素名と素名と記○云ふと通體○云ふと見○海子集
松平下流と云ふ徳國加領ハ系文更化と有
後合彼國徳士令因陣下本張自駿府夜あり
飛脚に來しと今日中流徳ハ系文陣也 創業
○奪ちりた

○海の集成十二日

十二日

至懸川

御年傍○森右日記○海の集成○武徳大成記○永井不長記○永井元通記○森右日記○海の集成○改日記

大野彦俊が海東大坂之西へ下りて、ふり付るに
能述子細に言上。大野不長腹立し玉一夜

彦俊が大坂より海東へ中泉に御志の曉也
劍書記考文○武徳大成記大野彦俊が大坂より海東へ下りての事
此海田有来と見性記より不長の子細に言上と云々○改日記○森右日記
劍書記考文○海の集成○改日記

自糸功保が海東に御志の曉也去六日七日糸功
徳浪人より長曾我が後友と云信仙石書

新子咽石抄が平松浦孫五右衛門の外長が海東人
子余人全浪が兼備抱在奈良表へ打かたし和
折被自支字治志本傳が及大橋及棘本
押分市正兄分丁付果也風父と通中上因是
臨川御志 改日記

十二日

至中泉

御年傍○森右日記○劍書記考文○永井不長記○永井元通記○森右日記○改日記

政事録、云中泉御志臨川御志野白、幕下
板倉月防が室宗系、潤臨川中津氣婦が今
岡が被附也 ○武徳大成記○海の集成

園言云鶴之乃今執如鶴之御料理を母元
賜○海の集成

自長崎飛御お事長谷川及去月廿

比日伴天連後黨百余家及大且那さるる右と

内友花孫ちそ外長崎申伴天連宗舟天川

をしく作云御使氣しとて中改の海集成

福崎正則の使志竹中を利り書と常して馳来り

を利正則の多と疎く曰作謹承りぬ作此度大坂

乃云起りしとを云思後といつる魚さるる

と作下しと秀枝の母子かゝるる思ひと

始ふ身しとをわもつれすを母の掌り計ひ

かゝりしと疑ふありあへりてははは彼

母子と疎直ひととんりあふ二人乃使とて泣

消息と通しぬぬとて不交上野介正純正則

大坂ふまゝす。文とつてかんもよふ度大佛

御造乃とて上法子。お清不恨みはるる

は結構をそとよりもそくははとくり

は家運のかゝぬ。お孫ふ白た時ありぬあよ

あそ作色あそく。母子のをを改らぬ

はあやまらんと謝しとてまも人もは母とて

駿府江戸のふるふふとせむるをふもくそふ也
 正則年未関系乃御恩家事と感てふと
 思ふに其妻ふ関系ふあり人保家する
 方と随うりを給いさしんふ正則天下乃
 筆舞ふとせんまきと地句ひすみやうの書舞と
 折破りてふふとせんまきと時ふふと舞ふを給ふ
 とありとせんまきとひあさくひは正則の
 目初めふ波りと給うにせんまきとせんまき
 ふのふと固魚ふれと裁きよりの
若編落〇改
の系〇武佐大
成化〇編子書成

黒見安房もたふふと世命の地と賜りて依て
 と長長松木大腰もふまふと何員合名地の地と
 引渡すくふと福植授けとま辰山田ふ富島
 重時と命とり給編〇書成

十一日

玉漢名

河津藩〇ある日録割書記考支〇ある日録松作〇
の編落松作〇永井ふおれ〇ある日録

政事録云外利中泉若清政次清政高天
 新川二津舟橋大石十右衛門豊浦徳右衛門をとり
 平利徳松忠師〇編子書成〇改り
 京都自伝かち飛御り状云大坂に候お書候

此は徳浪人跡多抱至山出紙江又持之と云
源三年七十八年関ヶ原御陣の時此款御
勘氣数年高野山に引籠秀頼由吉高橋
英令二百枚銀三拾貫目也〜大坂の終若宗
右京播磨人石蓮菴の浅井内膳也是庄母我
海心之外根株二百枚銀三拾貫目依令根多也
徳浪人馳系夏之知之負此の條の條の集成の條
自白戸御使松平助千平系此次申御機嫌
合間始此の條
松平肥後守右衛門白戸御善信傳御機嫌

松平旅籠御目元事〜國之馳系人形と信伝
固守守おのり一左右と云々御機嫌〜為二賜
肥後守松平右衛門此の條の條の集成の條
服領信政守江戶上系志早進任事國〜此下
借人救大坂表〜形お友雲和泉守祖子形
可及此御存此の條の條の集成
伯耆國代官伊丹山田出御前伯耆守右衛門成
親百中貴目持系此の條の條の集成の條
石上野分御目元事此信守始伊勢人救役
守御不可与彼御機嫌少少好力也此手録一

天子子に院移すを道可被為切陣に言被仰也
西ノ海ノ長成ノ城也

十六日

玉在田

佛羊漢○在名也○西ノ海○劍聖考云○海ノ長成
○水并考云也○武徳大成也○云云

據次交阿波也玉法云白口戸小正之城と
築の時大坂の礼を多て阿州ノ郷と飛し

先父墓庵よそと告る者居しと云云

南河と号し昔三品在田と名置たり

上野介正純を以圖傍く之候と

大津君の湯とんと違ふ命有く日圖傍く

東ノ城ノ湯とす

往く古徳院殿上湯す

湯は是に依く者居にす

成也

自糸形柳を杖云去十二日大坂堺より不被也

中身断人以下及異名秀形依被為伏致

袍玉茶式具大坂城中自堺取運堺の政示

芝心小云在田為之海東了る堺立退

岸和田河除

福治心別状とまり喜子と云居城中

居らしむしはは徳なり 武徳大成記

右徳院殿秀頼御徳儀とて大坂出陣の
供奉の軍列と定ゆべき

御徳なり

鴻田次左衛門 二枝右衛門

御徳なり

少林勝右衛門 米津勘十郎 永田左兵衛

兵門隆慶助 安房次左衛門 少島三右衛門

戸田七右衛門 伊豆右衛門 少坂新介

松田六右衛門

御徳なり

少天徳左衛門 寺山左衛門 内友右衛門尉

山田中七左衛門 朝比奈源右衛門 安次四郎五郎

今村左衛門 牟礼郷右衛門 進友勘十郎

石川又右衛門 渡辺半四郎 村彬左衛門

中川半左衛門 溝口外記 杉屋三右衛門

兼松源左衛門

武徳大成記朝比奈源六郎近友勘十郎

徳道具なり

社山平左衛門 荒川又六郎 中山勘助

神谷左七郎 山角又左衛門 伊豆新十郎

武徳大成記伊豆長五郎

山目付

山目付 松平左衛門 永井孫右衛門

高木九左衛門 本村源右衛門

富刺

浅井六右衛門 水味金平右衛門 芝山九右衛門

沼田次右衛門 市川茂左衛門 芝山七右衛門

高田七次右衛門 荻川左次右衛門

御幕守

朝比奈左衛門 内庭平右衛門

元禄十九年十月廿五日 武徳大成記 卷之三十四 茶

人数押し次序

松平隆興守 藤沢中納言 佐竹右京右衛門

一書

酒井左衛門尉 松平甲斐守

松平右衛門 役所甚右衛門

小笠原若狭守 神付小右衛門 水谷伊織守

仙石左衛門 仙石大右衛門 六右衛門

おろし大膳守 海軍集帳おろし 武徳大成記 役所甚右衛門 市川大膳守 作

二書

本多左衛門 海軍集帳おろし 志田源兵衛守

秋田城之舟 浅野兼忠 松平右近 海子集 松平作
桂村主膳正 一色玄周 楠波 俊次 海子集 俊次作

三善

林宗遠 海子集 林宗遠作 松平丹波 海子集 松平作

心条右将 成田左将 海子集 成田作

丹羽大将在内 武徳天皇 成田 成田左将作

四善

古井大炊头 海子集 古井大炊头作 佐久右将 海子集 佐久作

佐久右大膳亮 羽柴忠作 海子集 羽柴忠作

堀侯海子 古井主将 海子集 古井主将

溝口伊豆守 古井左将 由良信忠

五善

酒井雅重 海子集 酒井雅重作 细川玄蕃 海子集 细川作

牧野駿河守 服部玄水 海子集 服部玄水

新庄越前守 海子集 新庄越前守 松平伯耆守

与右卫门 依右 稻垣平右将

御旗本

伊豆守 依右 古井左将 依右 依右

左近守 依右 前田左将 日根野藏头

右近守 依右 友田左将 友田左将

那次元

申利元

芦田元

津金元

秋元

武徳大成に花谷と夏谷作

本年十月十日、赤名元○海○長成松平
陸奥守中仙公依行右京

左大臣中仙公の御意より高力左と福徳左の御意より高力右と依行右
以下と云ふは北条久太左と云ふ御意○武徳大成に依りて山崎守の下に記す

白井が勝る勝軍の御徳と云ふは、赤名元勝る

し、その中の内、百挺之の軍船と云ふは、赤名元一族

中人水、百八千人と云ふは、赤名元都、海、大坂

茨城の用、言、具、言、上、海○長成○武徳大成に記す

十二日

武徳大成
本年信○のり孫○剣業は乃大○海○長成○赤名元○
永井が勝る○赤名元通徳○信士軍次一日由道記す

赤名元の名、後、赤名元、今夜、一、言、上、被、陣、取、出、日

浮遊、正、宗、忌、江、戸、剣業は乃大○海○長成○赤名元

自、系、初、赤、御、去、十、二、日、於、禊、自、大、坂、人、數、二、百、騎

正、片、桐、市、の、人、數、二、百、余、堀、町、加、勢、如、多、羅、尼

才、左、衛、門、牧、法、右、衛、門、討、死、今、井、宗、兼、同、宗、春、討

死、し、由、自、史、市、の、人、數、尼、十、傍、近、亦、大、坂、勢、進

欠、少、次、之、七、八、騎、討、捕、圍、之、跡、次、今、元、の、如

自、大、坂、の、勢、大、勢、格、勢、之、勢、也、武徳大成
武徳大成に記す

福、徳、正、則、之、一、道、の、書、と、然、る、是、正、則、之、陣、上

海○長成○坂元

猶く馳向ひきこし彼悪黨ホと得すくひもと
中し亦也 大所本正別り中亦神妙なりと
主修之室安し有く妻子悉く堪中
よあをを重んずるとかへ健とい返さる。 萬福信
○西の病
○海の集成

自に戸御使成能甚後ち余志奥良政宗長尾
宗勝佐竹義宣以下余は江戸平進に代わ
り及火事作之れを我々其方次方出ると有
く火は作を 海の病○海の集成
に河路に於 祐若の通りと云ふと得更に茂教

素谷の如士松平七乳長定之稚子長祐と乳母并
後者店官以上三人を之と携へく 御駕之と付
熟柳十八と多し之飛くく是を然く湯と執るむ
祐若八葉乃小児ウ良く父上似きる也と傳あり
熟柳ハ園系乃之之服家古例也とく御衣は
不度是之御駕の内へ入るとむと云ふと愚信の
城之志所 海の集成
江戸小相方く 將軍殿大坂御登向し供奉
軍列決定此軍法は傳ふ
一喧嘩は御停止しと云ふ於遠背も不御理也

一 双方若し謀伐すべし或は親縁縁を以て固と
 存或は侍掌知者より好し依て荷振於有るハ
 本人より為曲事と云ふ意及下付し自然
 於用於て雖後日お女主人の為主科也
 一 先子と云哉假令高名賢軍法と云ふ概叙の
 付せしきふおめしとておんふ可致也
 一 子細なすしその他のお交の掌者といは武具
 する具云ふ取し君主人於是儀及下付
 罪科也

一 人殺押し討服及すべし云々

一 徳事より人々方ふ遠宵也

一 為時し使如何様と云々
 相背也

一 お経と為軍役し外る長柄と云々
 ぬらぬら也

一 但長柄し外おすべし於てハ主人の意
 可方一也

一 於陣中馬と取おすべし云々

一 石可押買根藉若於遠宵と云々
 可成致也

一 小舟結押し夏兼日、右福軍勢、之右定松
下、

一 船渡り、他、後、之、右、交、下、為、一、手、城、之、馬
也、之、右、同、前、之、也、

右、之、條、之、於、邊、托、之、也、宗、之、下、也、又、教、科、也、

慶長十九年十月十日
宗、之、於、邊、之、宗、之、日、也、

十七日

至、右、後、屋、依、留、干、 宗、之、後、宗、之、後、 宗、之、後、宗、之、後、 宗、之、後、宗、之、後、

祀、宗、之、通、聖、宗、之、通、聖、 宗、之、通、聖、宗、之、通、聖、 宗、之、通、聖、宗、之、通、聖、

宗、之、通、聖、宗、之、通、聖、 宗、之、通、聖、宗、之、通、聖、 宗、之、通、聖、宗、之、通、聖、

古、田、織、部、介、宗、之、就、醫、所、馬、庵、御、連、と、之、宗、之、

近、手、の、外、御、目、見、宗、之、通、聖、 宗、之、通、聖、宗、之、通、聖、

及、初、齋、御、科、理、之、習、之、宗、之、賜、之、宗、之、通、聖、

十八日

自、前、秋、西、海、因、之、御、還、為、宗、之、通、聖、 宗、之、通、聖、宗、之、通、聖、

自、宗、之、御、還、之、御、御、孫、菴、城、用、意、今、并、

宗、之、父、子、最、前、討、死、之、也、宗、之、通、聖、 宗、之、通、聖、宗、之、通、聖、

宗、之、通、聖、宗、之、通、聖、 宗、之、通、聖、宗、之、通、聖、 宗、之、通、聖、宗、之、通、聖、

自、加、賀、松、平、茂、之、利、光、飛、御、初、第、十、日、日、

國、之、登、之、也、宗、之、陣、之、何、方、并、在、也、

作と彼と舟と近き張了方々を被作の城を
少為殿飛御和東江州坂平近十石志陣所
河方可徳式と作云西思東と九條園等近
下相作と被作也 武佳大成記十五し記○坂見
○海の書

十九日

玉波阜

御筆書○劍書記有夫○藤右日記○時○痛○武佳大成記
○永井志名記○志名通性○海の書○志名記

右と坊主此の中柏東近系陣しと永系志海
本支更徳と牧方へ福松平の徳と彼福松
國徳士随く冬河底舟羽鳥之居陣藤松
福松と赴大和路 劍書記有夫○藤右日記○時○痛○武佳大成記
○永井志名記○志名通性○海の書○志名記

徳水在る即使と以秀松松附の状と、然る事心統
中上事ハ、神君笑つと、此ハ秀松年弱也（一）
有系徳理之業所く乃凶事と謀るゝ惑あり
よ便なり此前より加賀利老不秀松と一
けお妙と利光告知とある、是意ハ疑ひ
と、かゝりといふあり正徳命と来り書と馳く
信傳を利徳と秀松と、因茂ありと松平茂親と
松平茂親の傳松平茂親、浦津野仕と、与松平茂
阿波と森、茂、他と加賀式、浦田中茂、後と
生、約、徳、波と、外、中、國、西、國、四、國、と、徳、松、平

觸達一太極一云云すくく一初也 武徳大成 紀〇四九

藤福子白蓮子と我々の付法具を移入を利令宗師諸君の如き事蹟と記 如左或は補たる事作す他日〇云云先於蓮子の孫、曰又云母財是面口戸 由是子孫も傳子孫も右高作也如也又曰り婦人或は補たる 如海也〇蓮子の孫、六毛利長つる秀就諸君付法具を勝負家或は補 得如左云云内云依り右宗師付法具を勝負家或は補田中流後子と云云他 子の孫也

改事痛之徳永在る不補如事自秀就孫在り 披露状云今及市正對秀就孫不補仕令 有し付市正折檻如 大御下以て外山腹立 乞ふ所知り方しと被ふ事有る管如且ハ此 對面不補秀就孫以野人ら為火出言言上之 也 十月九日 秀就孫言下

驛路之制法と定り

定

- 一 取次中宿之本儀より宿之勤と焼之 相如ハ其人より徳儀ニ文宛きり
- 一 但自ら之勤と未焼と相如ハ宿儀と不 可出り
- 一 結儀より儀取と不より外へ遊遊す毎る
- 一 結儀儀より事如法定者定り相問互 右可相言此旨也

孝長十九年
十月十九日
大井大徳改酒井徳隆と記

九鬼長つと守澄新森村と云と發して世に
均く張と張とそとりて守澄 命と云
大船六艘軍舟中余船と儀と大坂とて川口
と拒と徳と運送の商船乃往東と云 命と云
石見八基山嶽より白浪浪おとあはゆへ伏見
左書渡辺山城を茂る但深津津左衛門の山若と云
彼國の白浪石大夫抱玉指碇と難波の清陣と
運送すくす命と云 命と云 海の集威

廿日

至相京

御年曆○孝長日記○武徳寺威記○海軍
集威○永井を孝長○孝久通隆○孝長日記○孝元拾遺

自系功飛御初草中云自大坂囁院と金銀取
二系御城を迫る家放火可致と後堂將人あり
数人捕りて云と右の内大坂町人金子六百枚
取乞食し辨 大所不許上洛路次阻りし方且
御氣色快然 武徳寺威記○海の集威○孝元拾遺
創業紀考夫云自大坂を伴伏人余二系と云
下令放火企あり將人あり廿人余捕捕
自 大所不徳録へ被お枝打言事あり銀

すむハ於大和彼お承

創業紀考夫○考元拾遺○故是

海軍集成云上京乃遷遷と福を以て乃

法軍志氣の負ぬふ意に板倉勝を城川に

根元と配分して京畿を根之由にすまハ銀

と以て後と云ふ

廿日 古徳院殿御書と友堂と虎上賜

於て枝入の事ハ故に由是ハ少も子と云ふ

書札と通令祝意ハ爰併仕盡く儀也

頃 御事ハ由左に云ふ事ハ

故に之と出るとも百も一と云ふハ

十月廿日

友堂和泉と云ふ

廿一日

至永承 御事簿○考元日記○創業紀考夫同一段廿日依和山○考元

考元日記○考元通遷○考元日記○創業紀考夫同一段○永井考元日記○

廿二日

至于厩所

御事簿○考元日記○考元通遷○考元日記○創業紀考夫同一段○永井考元日記○考元通遷○考元日記○創業紀考夫同一段

永承乃御陣ハ竹中守重利と云ふ

急正則福國ハ馳下り傷後ハ正勝正則無

被軍服と催して大城小向云々

譜○武徳大成記の海軍集

倭國船被劫多至... 倭船を劫ふ... 武徳大成記... 海軍集

堺... 言上去十二日... 武徳大成記... 海軍集

根... 言上因... 武徳大成記... 海軍集

言上因... 武徳大成記... 海軍集

武徳大成記... 海軍集

武徳大成記... 海軍集

武徳大成記... 海軍集

○海軍集

秀忠... 武徳大成記... 海軍集

武徳大成記... 海軍集

武徳大成記... 海軍集

武徳大成記... 海軍集

武徳大成記... 海軍集

武徳大成記... 海軍集

武徳大成記... 海軍集

武徳大成記... 海軍集

家康様御機嫌悪敷此度取次召置候事
なり申比御入在也御沖前召置候事
と申御沖前召置候事と申候事
秀忠様御機嫌悪敷此度取次召置候事
御沖前召置候事と申候事
御沖前召置候事と申候事
御沖前召置候事と申候事
御沖前召置候事と申候事

為後の御機嫌悪敷此度取次召置候事
御沖前召置候事と申候事
御沖前召置候事と申候事
御沖前召置候事と申候事
御沖前召置候事と申候事

若狭守と申事御機嫌悪敷此度取次召置候事
御沖前召置候事と申候事
御沖前召置候事と申候事
御沖前召置候事と申候事
御沖前召置候事と申候事
御沖前召置候事と申候事
御沖前召置候事と申候事
御沖前召置候事と申候事
御沖前召置候事と申候事
御沖前召置候事と申候事

廿三日

入洛

内年譜○存心日記○劍業修考文○永井秀忠記○茶之交通譜○茶
之拾遺○茶之日記○頃日記○徳士年譜廿三日○三年信日記上

入北 政事録云卯刻永原出河自去橋石平船櫓軍板

十一 惟不戸田左門於船中執河帳平刻二条亭志

河則片相市正且元同是也雲志出河是世頃大

坂城中勅別心若志之矣中上○武徳大坂紀戸田左門

友堂和泉志片相市正正河前大坂城深源之矣

之外志方書曰之抵辨以総呂中上○武徳大

自幕下為所使志心臣也帝志志之幕下

市出言可令急治之志作志○海軍集成

松平茂前志志陣下系迎陣取人數二〇余越前

志志何志志陣下志志下系迎陣取人數及

一二〇云云○創業紀考卷六 ○若志志通張張志志二〇百人三何志志及二〇百人志志

大市市橋二条河城小河志志志志志河軍法

志志志志志大坂城責曰志志志志志志志志志志

志志志志志志志志志志志志志志志志志志志志

志志志志志志志志志志志志志志志志志志志志

志志志志志志志志志志志志志志志志志志志志

志志志志志志志志志志志志志志志志志志志志

志志志志志志志志志志志志志志志志志志志志

京都二条城 可久代 板倉伊守と勝色 ○其長は

茨谷左衛門 依 ○其長は

赤池 ○其長は

二条河城普 日

松植二左衛門

丹羽七翁

政不為後人系 ○其長は

伏見河城代

松平源氏 ○其長は

○其長は 日下初云右衛門

成永右衛門

日下初云右衛門

大治普二組

松平丹波守

井伊掃部 ○其長は

根来二組 鉄炮百挺

根来愛深院 ○其長は

同 右系

町奉行

長田右衛門

渡

本村勘十郎

加普 八子百石

大橋孫三郎

あふん

同 茂玄衛

あふん

同 久左衛門

泉州警固

西尾量後守 ○其長は

櫻及尾崎居城

建於二十前

右目以加音

松平主殿

松平尾崎居城大浦松平武家

日

山崎甲斐守

泉原序和目

小出大和守

因和崎如音

本多左衛門

日

松平安房守

日

小栗右衛門

河内牧方互疎後平野

松平和泉守

高木重忠

なり

河内國府

信濃守

同左

服坂

右

大和

越前

大和

遠安

山州

保科

肥前天平山書

有る是山作○

委名拾遺

此山御定書と作本

覺

一 控去し而し難脱中早い者をお返り

一人質辨と若く外如又と量取坂とをお返り

附取害めたるをいとおわく、何れも是を

一 大道より外人難ふのをい

一 此為る中一と通人難ふのをい

一 若黨小若并史元御陣の改めたるをい

一 法料松林より主人への押取捕のり

一 附御陣の改めたるは若黨並に若宿の候

一 及や口中述の曲直

一 小若史元御陣の改めたるは主人

一 多形と取の集り若手形等し若り若り

一 のお返り

一 御年貢取置はれ、付くは急度このり

一 癸亥十九甲寅十月

委名拾遺

此山園より手並東海東山と名をい

大伴行七手形云々所云は道
大伴行七手形云々所云は道
大伴行七手形云々所云は道

本多隆成平康俊二條の御陣と云は
本多隆成平康俊二條の御陣と云は

城上高橋信○海○集○成○八○康○俊○竹○原○而○城○の○接○を○き○り○と○之
城上高橋信○海○集○成○八○康○俊○竹○原○而○城○の○接○を○き○り○と○之

大樹幸玄公に江戸玉神在河

日去一後升る○海○集○成○八○康○俊○竹○原○而○城○の○接○を○き○り○と○之
日去一後升る○海○集○成○八○康○俊○竹○原○而○城○の○接○を○き○り○と○之

秀丸様江平河ある一書上秋奈勝二書佐竹

秀丸様江平河ある一書上秋奈勝二書佐竹

誠之林系遠江と信正信代と大長崎と信正押し 村松之云

所為さふ 大敵云 新代所為けき八酒井の國

重忠酒井後後と右利内及右枝と未勤江は徳

新りさくさく江府城と昔情と八越後少右と越

右使院及 蒲生下野と右と右平大 昭亮と右昌

最上駿河と右就高右左亮と右政右後守と

くは福号不右進意なりく八連小村誠すくと

作合り。 武徳大成化○恭元進徳○海○集○成○八○康○俊○竹○原○而○城○の○接○を○き○り○と○之

廿四日

勅使来 唐橋西 所年徳○右右右○剣紫江右○武徳大成

沖封名と外と云々○海○集○成○八○康○俊○竹○原○而○城○の○接○を○き○り○と○之

水野監物が河使自幕下系向物軍家内あり
早生山及び此被作上作云政宗系勝義宣河長
其の勢乃先子急上河可然此作を
海軍集成
十八代元来系一政宗系勝義去其河府と奪す人方言上と
あり云○其の勢乃先子急上河可然此作を
大樹至茂氏 御年傍○劍業考夫一説○其の勢乃先子急上河

秀忠日記云 右徳院殿有法より上野城に
遊庵世駒心主して 右徳院殿小嶋と 命と
有く江下ふ起く ○武徳大徳院殿

海軍集成と遊庵 右徳院殿より湯す 云河長
右徳院殿に法海より上野城に遊庵

と八代次方何方心も富者す人此命とらる
遊庵と云りゆり登るといふも亦此の一向宗
大坊より其の陣よりより執持とて是
候難波乃戦場より歸りて又秀忠乃
法恩忘りては故なりとて徳人此れを
稱譽云也 ○其の勢乃先子急上河可然此作を

右徳院殿有法より上野城に遊庵
其の勢乃先子急上河可然此作を
海軍集成
十八代元来系一政宗系勝義去其河府と奪す人方言上と
あり云○其の勢乃先子急上河可然此作を
大樹至茂氏 御年傍○劍業考夫一説○其の勢乃先子急上河
秀忠日記云 右徳院殿有法より上野城に
遊庵世駒心主して 右徳院殿小嶋と 命と
有く江下ふ起く ○武徳大徳院殿
海軍集成と遊庵 右徳院殿より湯す 云河長
右徳院殿に法海より上野城に遊庵

台使と東海及中ノ運入をらん為と
再ハ此と發ル 海ノ集積

廿八日

大樹至小田原 御年譜○安永日記○創書は考案○海ノ集積○
永井宗吉記○そを通過○そを去る

大村若御書と蓮名了賜と

今度出表所候と有り入候と候候是ハ
信ノ御書をく毎細古井大村分アト也

十月廿六日

蓮名 安永日記

神后二條方候とて方官に承取とての書大信長と

百ノ命ありや久ハ能世承乃信軍ハ未承り命を
それと之書と以之進み改むハ一として別
言虎と之書と一所相且之と監軍をくむ
越前がわらむハ多取世のちぬハ一侍従の
名名と之書候てとく候ハ一和の花物々
言虎ハ後ハ一ハ 武徳大樹記○海ノ集積者片相之
林永承記○云遠出横次加久乃婢之團丸僅一
十葉守りハ一ハ壬午年と長江小門年とて
遠江平内中物家の部下小列ノ團丸ハ横次加
小止の由とて言ふハ一ハ命と承り信軍とハ

別頼宣の相傳とくく登とありりて
臨より上系し強く我場へ趣んと頼ひあは
神君のれと許しむいを信し向く回さるる
一寸の松乃中し、松田方容ありと云後國丸
う事欣既小英雄の兆ありと感せらる。
海子 集成

廿二日

大樹至三時 即年傳○別頼宣考云○藤原日成○海○集成○事
を名記○事元通温○事名記

廿日友雲の虎とて河原小奈しとて國守
陣を 大津若命とて虎とて國守

られ和良の軍能成也 海子 集成

河内國にありしとて○海○集成○事元通温○事名記
藤原日成○海○集成○事元通温○事名記
ありてすと云ふ

織田常去御對面是年平關ヶ原陣以來
軍人今及秀頼密使し御兵見於御前

内通す別頼行下は進言と傳ふ 海子 集成

云の所以毒細信等々左文字の力弄り之の服を授られ
平尚の後ハ領知と賜ふハいけと約せりとい

今日信大名御目見 海子 集成

於沖肉、後友サ三弟一言上曰松平義長と利隆
浅野但丁も長晟錫着信信も勝茂書事江
戸自御書信且御陣場素向板不自也

中上如根子恩借仁度火因乞銀二百貫宛自
史小身之信大^名借賜^之
○海子集威ハ信度方より小身の
信大なる為借券あり此記○海子集威ハ信度方より小身の
小依くハ概信管系小部。是た七名ハ各別白借二百貫自
之恩借く或ハ此名ハ廿八と記

今日系松系如正石御前珍奈良掃子 此の條

丹波篠山の城主松平因房より唐主山陰及の執事
卒し掃子乃地小端んく長郡飛入本年次

志別府川の端一畝方より志重しあると

警捕則河と城又佐良志川と傍るる河邊 海子集威

廿七日

大相自出倍道至信水 中平傳○或ち此記○創事此考多
○或佐大威記信軍考く、或くべしと
下知をらく此記○海子集威○永井系長記○考元通禮○系長記○故
見

系良一宗院在支院お御前室惟院所相主権也

石川保良も御自見 此の條

松平武敏もお御前奥しる被下人故厄く信給

系軍保様子今作給 此の條○海子集威

今昨自園系飛御前系為軍威今月廿三日
江戸御出する中、及は志所致方軍威行程

系親押今少緩く下押分彼作を 此の條

泉南堺屏乃高野系上系くく白銀二百貫

我々漢敵集人正是と披露 偏り集成
高虎と發して小山と急小敵少く國府
向ふ あり

廿八日

大樹玉懸川

所年傍のあり日記○剣峯紀考又○海の集成
○永井去る丸○赤気通漚○赤気捨道

昨日高虎不御書と賜り

書状今日を川をそと披露 偏り集成
立極し思ふく大軍古連以故より由
此よりと迷惑の余途山より古人敵候
二日二日流るるの上より百強我くと
と大敵の返候くは候し如し
アヤヤ世々くくくは是れたを方と
於也

十月廿八日

あり雲和泉とあり

高虎越前大和二ヶ國の云と共く進て小山
陣より あり日記○海の集成

既翻二宮院奈良大寺院本頼るつ孫妙
織上長老大使ち松岳長老御目見 あり

廿九日

大樹玄吉田

御年譜○永井玄吉田○創業紀考文○海○集○

創業紀考文○御年譜○創業紀考文○海○集○

況或具形如以下○御年譜○

江戸自 幕下為御使永井信徳○御年譜○

幕下三島屋御○御年譜○

池田御後○去夏幕所勅氣今○及御陣○

御氣也好有○幕下○板倉御氣○

御氣也好有○幕下○板倉御氣○

海○集○

大樹玄吉田

御年譜○永井玄吉田○創業紀考文○海○集○

海○集○

大樹玄吉田

海○集○

十月

大樹玄吉田

御年譜○永井玄吉田○創業紀考文○海○集○

大樹玄吉田

御年譜○永井玄吉田○創業紀考文○海○集○

大樹玄吉田

大九条向 河内

自今下京中 然限干而

河内○海子長成弘子行
と然上紀

八条官智仁親王二条及九条及妙法院高橋井

官勅所与口流通心院口流所對面日蓮宗廿

一箇与上人若所目見

河内

二日

大樹金名復屋

河内○赤木名見○永井名見○赤木名見○

創業記考夫云 物軍至玉尾及名復屋御志

所。是候近自京所 大所市飛御来探

人及上段下有候と路中 是は物取候奉

業及御孫頼。及上り給支不可也

河内○赤木

政事痛云自希下為御便内及在御所自

二及右田系志出所前希身政所中 御志

自後府信水石川自越川吉田近御志

言上知大軍教里行程不可然山也甚法立腹

不可然御志

大坂乃云舊田年人正山右左与平野と

田舎中 赤木名見

二日

大樹云大垣

河内○赤木名見○赤木名見○赤木名見○赤木名見○

片桐市正自出先子集德軍大坂取巻云云
二日作云云不知以前子云仁る安与被佛合云
源

及昏出使善時源左衛門中女友四年天皇与口
先子物云云是如内来及所与至而小山思安
和泉与後陣之辨中上作云未後遂之少可押寄
中松平下徳与石川主殿介右田大膳左使徳永
左与介人教平野与下可相結也云作云 政の痛

松平隆興与自途中为使山岡志摩与子云
二与出所云云云自云云故右平和入中云云
为便陸奥与頼思云云秀形状云云物来陸
奥与返答云云所云御恩何云云于於秀形目公
不思秀与才云云云云被捕以云云依後与秀下
言上作云云最神妙云云大所感云云 政の痛

茂堂高虎云云河州道の与小山云云
海自集成云云虎子の日及所与の深云云等云云先路後色
幼云云云云何云云小山云云云云松平平野の世里云云入大仙陵云云云云
可云云云云云

櫻井園河内云云押お云云云云云云云云
紀長清野但云云于今云云云云人云云云云云云
大所云云云云腹云云云云云云松平下徳与世与牧云云

居陣自 大所而以所使宣示 八云子名之進也
下流与子 本此之可押也 也 創業紀考卷〇海〇
集成平野之飯表
作〇米名月〇飯見

巳日

大樹至柏系 清平傳〇東台記〇創業紀考卷〇慶長日記〇永井
考長記〇米名通性〇米名拾遺〇海軍集成〇海軍紀

故日記

今日南殿出陣之信度所方所前一急度所方
出而所封而信云或百餘里清祀表云大伏
少將金地院云來元初仕下可之 与内之可
以所表知數里何候大云可也 志下云云上野分

板倉信加云所立勝 海〇海〇其間の事云云
の城と東信 非若く福と云云
及英昏大坂退治高野相市云或所前上野分
停候云云 常刀集人 石所前清高令云人終大云
中井大和云 伊丹大坂之邊清高之梅原云
海〇海〇集成

此日松平下流与子忠助及信度乃軍勢不飯成之
下陣云 海〇海〇其間の事云云
海〇海〇其間の事云云
其元拾遺云云大坂傳牧京要害之如海之
浪川子前之苗大丈云是之梅大坂乃懐之
自比云云云云 与後物乃是信下軍兵云

加へる出しを支度の手へて申渡すは
松平下宿より申渡すは濃兵衛殿乃軍云と申年
しつて富田高根芥川洲赤若江より出
牧方近押寄依田の境乃とより矢炮を打を
しつてハ忽致乞しつて大敵へ入

六日

大樹至依和山

御年傍○表名見○劍書紀考云○永井表長
記○表名通世○表長見○海子集感云和山

山使書松田甚右衛門依久右河内と初麻野
河内と自山名子系云山名子位若表出張
改○編

片相市公右御前暫上故致子云被仰有申

上野介と申市公境云日比半右衛門河内二領

有領 改○編

山名子友雲和泉守軍勢濫妨根藉致火し

被安下御立腹堅可停止しつて被仰有申

美治と平方道陣取濫妨根藉堅制禁被安

石甚御感 改○編○海子集表名○十月廿七日○此○故見

横濱國河内へ押おしつて元彼國中大人累以

令致火しつてハ御用の所と云表誰り業と云は

しつて故火致乃御前と被お御来平方道大難

剣業紀考卷六〇 本名見九〇 坂見九

此日松平忠房乃及濃兵乃軍勢等進て平野の陣と高田軍人正山に在るもの平野の陣に張とくは高田言高虎任吉と相張り且

濃兵此軍勢等進み来るとんく今松平野の陣と門あり大坂の城と退

○此の條は自大坂高田軍人正山が平野に打ちあひ大坂下城を逃る早進り取らぬ是下城を平野に控陣あり由は此の條に記す○剣業紀考卷六〇 武徳天皇御代に高田言高虎は平野の去後迎撃を果す高田言高虎は平野の形見と云高田軍人正山は高田言高虎の弟と云く城中に逃入ると云く高田言高虎の弟と云く

武徳天皇御代に松平忠房も高田言高虎も高田言高虎の弟と云く

高田言高虎の弟と云く松平忠房も高田言高虎の弟と云く

松平忠房も高田言高虎の弟と云く

此日高田言高虎は高田言高虎の弟と云く

三騎来りしと石川重成は高田言高虎の弟と云く

三九騎馳来りし一騎と討取残二騎は遁去

右の首級 邦秀く、然るに高田言高虎の弟と云く

首級也と御感悦甚く 高田言高虎の弟と云く

大坂下より陣中を自付七人し使と被遣

謂る山城守内滝川豊久と城和泉守松平忠房

横田甚右衛門 三田源波と神康傳右衛門等也
此月亦月豊前五人ハ大坂を去る元也七年
王政府 大所折へ奉ふ 創業紀考夫○武徳大成
六六の月三ノ人ハ命をうれ
大坂小室りし史りりくは志あり○海○集威ハ上七人ハ監軍
とて先鋒の志あり討ち死す
將軍家大垣所宿乃以援提江戸被上銀百
四十駄度くし上別 創業紀考夫

六日

大樹主永系及于世而得後志 附年廣○武徳大成
創業紀考夫○永弁
永系記○武徳大成○永系記○海○集威

昨日大坂の城より去と脅かす天の王とて焼

武徳大成○創業紀考夫○武徳大成○永系記○海○集威
○永系記

友雲和泉守淺野但馬守任右陣取也
武徳大成○武徳大成ハ七ノ浅野但馬守長成記其の云一万金持と
仲く友雲と陣取の云ハ七ノ長成と云ハ七ノ浅野但馬守
右ノ陣取ハ七ノ長成と云ハ七ノ浅野但馬守
先防送友雲計と記

加友式部少輔所自見毛利宗場侵す宗平
後前より所自見中々上野介披露 武徳大成

今日右田祇音院法衆系七冊進上野
聖方大徳院所前上云佛法ノ所難候上
野介披露 武徳大成

昨日松平上総守と史徳但平野と殺す

進むゆへ平野の警固と松平本居の伝存と
命とり伝言南村おろし本居存和国の城とハ
心象おゆる氏まゝ渡り平野へ頓業ハ大坂
より行程僅二里と云々 海ノ集戯
本居川乃船渡我備に存立る宣政小命
と云々 海ノ集戯

七日

松平本居の傳老徳大和川におく云と進先
川と渡りけ色ハ城を逃去と進打りし云
破り本居と本居系於河邊をらる 武徳の城記○
武徳の城記○

○松平本居を破りしと云と云々
○剣峯紀考矣小和川と記○海ノ集戯云々と記

本日御出する竜田法隆寺郡山御城伝老徳大和
川を渡りて海ノ集戯

蟻原賀阿波と出陣本居と上洛神女と云
と云々 海ノ集戯

八日

池田本居の傳老徳大和川を渡りての傳中
蟻原長柄川乃下の所ハ本居本居と相て
渡りんとすし知れぬ本居南中の号と云々
と云々 海ノ集戯

九日

大樹至膳所

御筆傳○赤方日記○創業紀考矣○永井老老記○
赤元通暹○赤長日記

振付國達摩与御判札下上野分在

海子傳

十日

大樹入伏見

御筆傳○赤方日記○創業紀考矣○武佐長成記
○海子集或○永井老老記○赤元通暹○赤長
日記○飯日記○八段紀考

政事錄云 將軍親自永承到伏見御忌膳所

城之产田左の點所膳公赤元信元信元信元信元

道分と為御達赤承御成中御成道分と

為御達令前於御對面

海子集或○永井老老記○赤元通暹○赤長日記○飯日記○八段紀考

今日自仙洞類聚三代格六卷 送平武後一條院

と年代号十九卷 類聚國史二卷 古徳拾遺法名

要集神皇系馬南光坊為院使持系及

夜乃去於所光傳也

本多法海寺江戶香園东城く在自人教と

在御跡より出陣今日是尾以名傳在類

記考矣○海子集或○赤長日記○飯日記

十一日

大樹自伏見東二條城而得 云

御年儀○嘉吉日記
○刻業紀考卷六十二下
一説、土日ぬはと載○永井若君紀○本元通歴○苗孫傳初巻下○若君
日記十一日上記○海軍集成

政事編云 將軍家自伏見渡河二条城

於奥御座より御對面今度大坂御進齋

矣 將軍家御上志令侍候し長辱は被仰上

不度上野介成徳年人正安友帯力板念侍候と

酒井雅系助土井大炊女友對するに御前

作曰明後十二日可有御進齋合未別 將軍家

於伏見還御」○武徳大成記曰

今日松平主殿今侍奉龍後と取入林等表

多香迎向堤崩し河水と下流は上御前

係

松平隆興と御自見今度 將軍家供養を之際

也 海軍集成

今方衆兵場今井宗董同宗若岸若自

大坂城遁也 海軍集成

成徳年人正と大坂表小をりし他田在つ邊

大坂下川肥後と遠安花房志摩と正成り

一族長柄川と越く南中の河と取交親率

と討取首級と然りと獲とられお供り見

利隆と礼海西乃花軍兵不後進ていすは神
等七急不支ひり可と何り一先也 海軍集戩

十二日

尾張軍ねま後二條御進發本付川色

御止宿 改定條○劍紫紅考夫八帳一は去一は本付と記○去也

長尾景勝佐竹右京上軍至宣御目見

將軍家御目見也 改定條

及菅氏自南光坊傳長老出江の十三日辛酉

南河惠自之出因之十日之御出之御進河

海軍集戩○海軍集戩○去之條也

十三日

禁制

一 軍勢甲乙人等監視糧藉

一 放火之事

一 田畑作毛之刈取 9 付竹木よりとる

右條之具令停止迄於遠北之軍之進可

被重嚴科之旨不被作也仍如件

十一月十二日 對馬島 海軍集戩

古井大知介自將軍家御使自依人系出

佛光暫御密候 改定條

申利南殿出河細川玄蕃殿新居越前守父子
公前掃部介之外法士御目見此の編

横田玄右衛門山代官内少将等子物見人目
此是知今有御系出河前中玄右子徳徳天

去与打込大坂城十段女所を過押寄山
伴云將軍家清下札以前思手おし下有る

被仰付 此の條○武徳大成記○海の集所

内蔵左馬助政長兼子右衛門房州守より飛
けあつた奥大坂へ送りしるしとて送服

小思ひ又政長へ頼りし徳いおれハ政長志止

かゝりしとて玄士二十騎率百余人と撥くた奥

急ぎ伏見へ入りし多佐佐信忠行軍り

徳いおれしとを徳いおれハ正信も吉本と

捨く率束よ上京す。右命と輕人すまふ似

そりしと云おれ若言上しけしハ 神若史先

若菜乃士ハ遺恨なすももむなりしとて右出

うれ酒井左衛門守の但し入玉ひ松平丹波守

康長ハ右奥の男ハ康長ハ梅しとて

たておすししし作付らる 武徳大成記

山に修理亮を政罪行りしと依く武臣竜徳

小勢をくけり。公井大徳氏利勝、許く状、
是の一日、清原恩と作らる。好ふと取、
城へ送とんく。秀光、利殺し、清恩と報す。
魚と存る。妻子ハ江府上人質、の為、
大徳く、志を、往人と發途、
は少心箱根、
ぬられ、世茂、清光と、
云と、
依く、利勝と、
是の、

十日日

自江戸、
改日、
武徳、

十日日

出活陣、
御年、
任長、
采井、

○武徳、
○藤子、
○村、
○和、

政事、
大、
总、
中、
祿、
采、

宗吉服逆命花江舟入る所おとす所老松二悔
と徳是元年の江右例也

村城をよる云 家康様所馬也所旗七本也持筒

三挺也右二張也餘百本對し所經二本所十字字

そ本所長刀一振也 家康様大和國本付し

未く下別所急陣湯湯漬と云して今既

宗良逃所動座よりいさる也供中より用意

可波也と仰り故上野介也下供之面も相弱

作家小下也立と也供漸三拾騎斗也宗良

と江後二里す入南故入湯急陣と云

士軍傳

大樹出伏見陣下牧方

即年傳○老松日記○改り庵平方作○
劍業外考矣○海○集○考○元○拾遺○

○永井考老記○考元通歷○村城之云所急陣と云○
此押とある云○武徳上成江○平野○山○陣ありと記

法軍へ今をいれ可く小陣と堪のし依竹宣

と牧景勝堀尾心城も上供京極丹後と云知

不多也云とわね給志田伊豆と伝次國河内と

伝有淡野采女長主松平丹後と光主牧野

駿河也と成西尾豊後と上改徳永左馬助善昌

酒井左衛尉家次目玉内上捕丸勝京極若校と

也と修程と史とる改を利伊勢と若原織部也

定方保東修治を交結交ふ事後原野勝備福崎
備後守正勝松平石見守正徳植村正頼正康正
祿保小次郎正宗秋田城之介定季正石見守正頼
好俊六之丞正原政宗相馬大膳亮清胤松平
甲斐守正良正基三郎正光水谷正徳正勝正澄
保科肥後守正光松平丹波守康長松平保良守
伝吉正元越前守正定之羽柴丹波守正各正乃
方正長正今福正陣正張松平正中守正定徳大
岩の但元正帥正之例正陣正松平正現守正利常
南乃正岩正山正陣正張正現守正利常正
陣正之例正岩正高正井正現守正利常正
之西正陣正之例正大正和正軍正士正生正助正現守正利常正
備正尾張守正中守正現守正利常正
正若正陣正之例正前正陣正之例正徳正
今官正奉正鷹正心の間正陣正之例正浅野正但馬守正長正
松平正石見守正頼正正徳正植村正正頼正正康正
正徳正勝正我松平正正徳正正頼正正康正
正之例正今正之例正乃正之例正正徳正正頼正正康正
正之例正乃正之例正正徳正正頼正正康正
正之例正乃正之例正正徳正正頼正正康正
正之例正乃正之例正正徳正正頼正正康正

た馬場右後衛右とたの政有るを善政貴氏
戸川肥後とホハ小方中河神崎小津と張佐軍
可くも完満也 武徳大威元

是よりさ記 神若津使と以く松平利澄と
命をられけり。神崎大川なり船筏を以て
船又渡せり。軍を成せしむる。船より
ありあれハ利澄二三日前より柳川中助と
きり。水の浅深を計り。先より。舟を
歩後小なりが。船筏を用意し。あふ
た。船中十六日。船を馬に打入。船を
渡す。船も。相長。士七。余。船。一。因。小。河。川
肥後。も。船。を。渡。す。と。利。澄。も。去。と。船。を
神崎。と。渡。され。け。り。善。右。と。有。る。云。善。右。と。船。を
船。り。く。進。み。あ。れ。ハ。船。の。清。復。す。云。船。を
と。船。と。も。船。の。船。を。破。き。て。逃。散。せ。り。と
船。を。去。り。と。戸。川。肥。後。と。士。各。逃。撃。し。て
首。と。多。獲。き。り。と。船。を。和。田。と。陣。と。取。野。と
通。り。中。河。と。船。の。船。と。計。り。け。り。 善。右。表
神崎。と。船。を。易。く。渡。り。あ。ら。と。父。下。て。中。河。の
要害。地。な。れ。ハ。神。崎。の。利。と。ゆ。く。卒。尔。と

海より軍士と傷くと思ふ城和泉より
申渡り形勢致らん卒ある歩勝りたるは
魚丸より傳あり利隆亦た強く先とせられ
き。とを述べ不思ひ申渡りをせよ勝りし
おちつれり城内より我をせよ其より
織田有楽波多内藤清成及之を指す対七組
乃軍士共一万餘騎ありと利隆より
そや下知し河と勝らんと思われけり城
和泉を阻む。大河より陸地なり舟にて
軍士と渡りしと割し利隆を入る

けきい和泉より大衆と揚我 和泉乃作わく
其より是非とせり勝りしとのあり
あれハ利隆止とせりすく止る安倍四郎
正之をよありける。和泉より諭し中津
因公より城衆集りし脚使とせりし経年
戸川肥後もと衆とらき此の細とせり
林若菜右惣領く此時致幸より多分出
利隆川と勝りしを不軽ハ大津ハ討取
和泉より時を告りて止れりして衆より
進取せりし此日夜ふ及て城を退て

固之亦以六代徳と初として悉く中流に渡り
海西乃徳軍を来り今其城中の老若天備
此地廣くして徳切つてたゞ海軍を燒け
皆城内に引入れり利澄忠徳森右を池田
内中より細川城中より有る云昔以悉く田
の云并に加賀式形を捕獲す後後より関長つ
松平内流より戸川肥後と逢安亦そ外西國の
徳軍悉く天備に入つ西に陣を張竹束
金楯と設け進取んと計りけり永徳は校
たのす丹羽市と見え固主帳ふす徳良の軍士
等京路牧方より出く徳軍將より入んとて九鬼
長つち小漢より大市向井宿監より其孫を西國
兵八市等西轉法院乃水濱小舟より云船を連
り来り進む徳軍の云る大坂乃は勲より元
備へ二十里程北より大坂の地を透るべき
概よりんくおちり 武徳大成化

十六日

陣于法隆寺

御年傍○赤松日記○西の孫○刻業は考長○山
其成○村被之云○永井を君記○赤松通徳○赤松
於遠○赤松日記○坂見

為幕下御使自平方永井信徳より幕下

今卯卯平方御進發河内是山可方御高海也

言上 〇編〇海〇集成

十七日

陣了任者

河内傳〇赤石日記〇永井赤石日記〇徳土軍後〇長元通鑑〇八杉元時〇刻業記考文〇赤石日記〇坂元記

改事録云 大御所様御任者御高海御自今日

法奉々軍志甲冑 〇編〇集成

村越覺書云法後より御進發令令赤出城任者

御高陣之管也後任者令令赤之城大坂表令

出張切勝利の例云 及令加〇作一軍程云云

横乃小出如り上進行路等之如也御高陣

故田々申講々申一足場悪敷有之申通々也御高

此供々若単卧以初片人子若々懐我々之云云

乃々案内由六人 赤良乃若方々以て山居の

心村任者御高陣夜入以也 秀方様と初赤令

之徳軍供所云陣と有侍氣山如夜入任者

御高陣也徳軍何以横越何云江取陣以故入与

退礼務初任以云々上途中一毎天小付て不持々

法炮打放以故甚務敷以後六車上野舟若

能加制河大勢々々打立以故有制法以初ハ

御陣全御務委以之乃二三放了打々不持也





此城亦後ハ惣旗炮打致ハ故非是此時兵大城
 宿討江を以テ思シ候ニ可ク勝利あり村城ニ付
 石谷入物候事ナリ○本ノ先拾遺
 於位有友軍和泉等淺野但丁等城次加河波等
 松平茂前等利光親父少将約後波等一柳監物
 父子松平下流等本多忠徳等因平八古田大膳
 本多左衛門素心侍等与服取法政等松平与内痛
 之外徳大取不勝計为清目見系上友軍和泉等
 松平茂前等古河前大坂表給事令見預責口乃
次方被傳付河野惣志清河村一ノ乃

大樹陣ノ平野

即平野○本ノ先拾遺○本ノ先拾遺○本ノ先拾遺○
 本ノ先拾遺○本ノ先拾遺○本ノ先拾遺○本ノ先拾遺○

及英皆古井大炊介為御使系上仰云明日
 卯天光陣ノ城下方御覽 希有天子与茶麩
 山の道下令知候ニ与御合人炊介為系改ノ痛
 九鬼長門守子与八市小侯久右衛門本名船
 百餘艘系入武徳大成記○海子系或小侯本ノ先拾遺
向井と考リ将法院口之船と述ビ

十八日

公与大樹登茶麩山巡見大坂城而飲之

即平野 ○本ノ先

目化○本ノ先拾遺○永井と考リ

○改事簿云卯別 大津不出津茶田山

○幕下自平野子天目山出津 大津不令得

○須別有堂和泉寺不多依渡寺石津茶城寺次方

○津河判之外付城下有寺之方之被仰付茶田

○山平岳坊及本付之外而付城被仰付城と

○城去寺と築(一)は茶田山と城被仰付し

○廿七八町寺と 大津不任在 為軍事家

○平野遠津有堂和泉寺為寺覺方所用心

○鉄炮二十挺茶田山之並並置

○武徳大成記○海○集○創書紀考美○

○此日據使契所彼寺主結本付寺小寺り船と

○寺と水陸乃地利と因障とて寺と茶唐山

○小寺と 而寺不獨の地利の換益と達し且

○種多々所成巡礼乞しと請ふ乞と許し而

○本寺依渡寺小命とて又主結とて曰成野

○長嶽と寺と謀く寺と改付し寺の津寺と

○系

○九鬼長つち寺の寺八寺不影南村 野田被寺

○進く寺と被らんと欲し

○奥の寺元依んと主とて寺の寺高表と

○武徳大成記○海○集○創書紀考美○

○野田被寺

系陣治次ノ居陣創業記考矣○本名日凡○本名祖

陣場ノ主領也本名男也 西河正清志ノ上

西人支入束ノノ賣買ノ物多ク創業記考矣

頃年大領受來ノ立近ノ世ニ世而廣宣坂次

三十年度勝上小意ノ系向ノ母而ノ為得ク

別再ハ竹葉人ノ列茶山山廻ノ案下也○海ノ集威

豊崎主船伝備加ノ凡甚平而由隆日中於而人

主好シ上浦田上左系秀以村敷存

彼ノ也使者ノ列海ノ集成○本名命送和国多々本回村後
十九日ノノノノ
右也ノ我田上左系と右系作村所と云々

十九日

命傳信知大古前信 海野長蔵但馬 取穂多城所年信○
永丹在書記

○本名日記○海ノ集成十八日

城次突玉島海野長蔵云と養ノノノ様多城ノ攻

且船ノ浮ク華者ノノ波ノ水路ノり攻入り今

欲ク城を推トノト也ノ城ノ自燒トシテ仙波の

所ノ免入即日進テ仙波ノ攻先首級ト也

若多ノ世日陸地ノノ陣主領ノ境云山田城

被統極ノ肉系御海路乃先陣表甚女を城

等奮戦ノ軍功ト云々ノ主領使ト馳ク也

若ノ是ト達ト速成ノ功ト御感有ク使云

よ善服と賜りて志願既成ち安者次在舊村横田
甚若西の村に多友四郎に人監使とてて種多の
所より主の氣信より來りてと要くして軍功と
父く あり記

劍業紀考吳云 祿友村と云ありて有田の城是
大坂人殺おき竜院河元ヶ傍舟路と止作増廣
阿波と被毛人数如款別と初く引入 此時

阿波と水陸ありて入り別時宗取と云ふ因
織部頼朝に自給助甚甚と云ふ事あり 友部不
所感状と給ふ松本之月か捕りて其捕物書也

因有切 云所感状と被下 ○此の條は増廣の傳
り外に記○或は他大坂の増廣と一子の云ふに被りて記○
亦名日記○亦云々通體○切り記○業々所感状と賜りてあり記○
其の云々あり

大所不増廣阿波と被下と大坂乃所傳
ゆんとして汝乃婦子衣の紐ねと云ふありて
友康親と云ふと作ありて先手あり
所書と云ふありてありてありてありて
下りて小神二領若令三百あり賜りて
舊編傳の事あり記○ありてありてありて
幕下於大所不所傳不任古渡所傳對面

大坂陸軍本支佐後方同上野今夜雲霧水鳥
如友常力成集人石所示所評定核利魁角
信川与香思の按津地切落之と堀止之然也
被仰付之と天備比之彼比天と之と自也方
一度可責以評定相極之儀宣乎採可取也彼
作月去儀數廿万二ヶ國早進可也也被究
幕府所相体 大津不被下上所服 此の備○
武佐十歳

廿日

和泉國：自法軍下軍札入して被管社佛閣

薪の取伐竹木頗及根籍是と為致云國被並西尾

量後也 劍業記考之○不名日記○海軍集威十八日記

本支更慮与赤仔勢元自平野位若陣勢 劍業

記考之○不名日記

初々入く大雷雨一々被陣中ハハ島際 劍業記
考之○

大坂城中元と村田橋在場と云云若切是命

出合對面と云云 劍業記考之○海軍集威、神君の命ふもて
村田橋在場の海軍と軍のふり、勢あつたに
軍の至ると判し、城中へ入和融のゆと、右後、村田の元と記廿一日の
ころ也

廿一日

城を持録書而出右を捕く焼鉄印額進入城中
御年譜○永井長元○その名通世

ある日記を所入人あり任去小東て所管
中と新く警備の云と生捕く主殿と同
友雲高虎の陣と尋て途不迷し云高虎
天まろし陣と彼と尋く是ふ東ととと孫
て是と信問も小世と秀頼より高虎小ふ
謀書と懐中しと生捕く去信く曰友雲高虎
浅野長晟の秀吉厚恩の老也是ふ依く
大神社の命と云く大坂の城と云く

竊し志と城の中と通く或ハ衣服或ハ酒肴と
送ると教度小及ふと云是は信物を疑はし
謀書小し依く決と焼く間者の額小平と
手足の指と斬て紙旗とさくせ戸板に載し
城を不棄る彼間え大野主と今う後去なり
乃也影るし依く紙旗よまるとなり紙と事
○武佐大威化の圖ら及謀書と云高虎小賜ふし
自備中下福浅野但るも子へ走入 大野右衛門
城布の物と令問給彼と云友雲和泉と浅野但るも
秀頼の被書信と云と云と云と云と云と云と云と
被進入と記すものといひ○海軍集

幕下為所使公井大炊介為友討るも幕と出

所着大坂表を急討城下致しと作後
福若後復す正勝秀頼より東伏見通と云
礼○海子集戌

廿二日

松平武敏と利澄福若を急討森村と破る
礼○武法大成元○不元通燈○海子集戌
廿二日

お多兵濃とた政及傑良の軍勢平野より佐右
よとく
大神若乃陣陣の市子佐右松平
浮直の佐右先日とる岸の和田乃城と勢高を
右通流及御方と賜くとも右佐右平野より

お多兵濃とた政及傑良の軍勢平野より佐右
よとく
大神若乃陣陣の市子佐右松平
浮直の佐右先日とる岸の和田乃城と勢高を
右通流及御方と賜くとも右佐右平野より
お多兵濃とた政及傑良の軍勢平野より佐右
よとく
大神若乃陣陣の市子佐右松平
浮直の佐右先日とる岸の和田乃城と勢高を
右通流及御方と賜くとも右佐右平野より

大坂上旬より廿二日と二度小自名復成
大坂上旬より廿二日と二度小自名復成
大坂上旬より廿二日と二度小自名復成
廿日城中乃士盛に其介と云云と松平武敏と

利源不寄く徳大寺城中へ志と通す久共多きを
大坂へ戻りて秀頼公に候きつて若然
某密に城とかく報せよとて中をいれぬ
利源と女使と捕へ文と共く恒吉乃以傳言
小執事 神君命ありて志と通す若くは
拷問せしむ松平より大捕り難う法政國乃
領事へ大野修理亮に状と贈りて曰日本の
徳大寺多し秀頼の志と通す若くは若くは
芳恩なりとて遣へり又中難う若くは
州とていふも使とていふ人と捕へ二通り

州と流住者乃河津宗一 然り
賜りて六六之 喜の痛く贈りて六六之とて
百と記○若くは拾遺○若くは通鑑○坂見
松平隆興も心宗も宗隆も宗隆も
編年集成も心宗も心宗も心宗も
本傳今あるものも宗隆

廿二日

宮城丹後も豊成傳前記も在く後物不申り
無と記す 右徳院殿於以宗源六帝とて
是を問りて先由と 宗源の海も集成
と秋中領も宗勝河内領も進くとも細し

陣し又し信濃野邊と應く申る村は此
大坂城乃良の方なる指ふる川北流し押借る
海多岳成

柳東遠はる藤勝を助下と率し城の東北なる
大和川を福田村し陣と梅を海なる命と為る
海多岳成

廿六日

上松景勝と城を我下信濃野邊尾上城と接
景勝と欲我同日佐竹義宣と城を我下今福
海多岳成

是より今福邊は矢野和泉と飯田たるは是を
拒く大和川のわり院と今福と云 信濃野の上松
景勝今福は佐竹義宣是より上柳東遠はる
藤勝中多助雲と大和松平丹竹と藤長丹羽
大和尾上守長と城尾上城と大和飯田たる是
今福と我下安友次右衛門尉正次左代越中と
勝永侍友右と云亦奮我下勝永は男左代甚三年
右正一時サ 矢野和泉と上松と云首と云
佐竹は城上飯田は先鋒と進み我下

鉄炮の中へ死を祈り奉るに村十人
 戸塚九希と名付村田去原等奮戦て我功を
 書す 此日上松宗勝去之發して伝野
 我宗勝の徒士松系常陸鉄孫左衛門尉
 次田大助舟安田下徳等侍る軍功書を
 坊尾山城等と照宗勝王援而く奮戦す
 丹羽長を因進し初に入不多と云ふに於
 佐竹の陣へ入り代り今福と向く陣と
○氏
徳大
 成記○海○島成評記我○本名り記抄○本元拾送日上○本
元通歷上○成記月上○成記月上○成記月上○成記月上
 劍巻元考云云佐竹陣今福と自城中出戦

打鉄炮今日佐竹元と我十人佐竹多討
 佐竹家中能老若外百八十人討死と云
 此日佐竹の云に戸塚村十人
 半右衛門悪伏甚と名付戸塚九希と名付
 亦有功後 為軍家若賜御感状因日上松系
 勝於佐竹野城と云と我の坊尾山城と上松
 王援し我の上松の云松系常陸次田十人
 鉄孫左衛門亦有功 為軍家若賜御感状

廿二日と記

廿二日

赤

九鬼向井の如き獲船數艘

御奉傳○東ちり記○劍業
記考○夫○武佐上成記○海

集成○永井を長記す方と記

獲船は徳兵の中輩等より後へて若くは選ひ
取るとも云ふるのハ古地杖にて後切しし云
少くしてハちり難しなりハ選りし意すも若く
然如く石川主殿改む徳宗又相換ちる輩より依
て之はなり難世候より功より依り衆と雖も
思ひ住吉の御陣當り候ハ古あり永井為勝
小依り輩より行りしと後より 取らる
御陣ありて御付りれ共々なる徳宗と意す

て輩等と云ふ

武佐上成記○劍業記考○夫と云ふ一記其ハハハハハ
○考るハ記其方と記○考るハ通置同○海軍其成其記

福吉と賊衆今お抱ふ今日徳宗元押取別位
地より古陣 劍業記考夫

永井右をち支水野日向子編丹後も若作織於心
是より出く作候へ遠来く言とて敵七八子
野田福吉ハ古張り陣と思すも是取れ
御進ん可有とて徳奉の云士百騎と云作付
通置○海軍其成

奥方以正宗 古命と兼く徳宗橋本向ハ仙波
今云くも申方小徳宗清野但もも後陣正宗

初八介おと奉向心との間陣 支え通温

は使番阿部は希ふ而西之午候として水中の
是く敷度越さるる今日平野より急候
不多正位の日山南の中乃是る新表居る程傍
道とのる天晴よ向く附城とすくはる
取と官西之地利委を廣後しけるハ正位軍を
携く 古伝云乃所前よおく大給島と披
正之り意味と具しと言ふす午時時
大津西と傳りおく本海に述るし遣りしるも感
とられしと云ふの夜卒を氣と凌りしる

手負多前集り死後すくはるは憐ししは附城と傳

云云氣仗んと誓く御為云東表暖氣とひ
南城と改らるるしるもの安友對馬の正位と
水中の是くをりし業とすくはる地形と監察
とらるししとすま位と先くはるの正位と爲
奪とすくはる表よ表とすくはるしと命とられ
あかりしとすくはる正位と古く 大津西と計らる
おく附城乃場南と改り欲とすくはるこれハ
西一人お越業の地能んかすくはるは使
あり正之稱日弱年の正位とすくはる場南とす

究へざるを候あり對するもしお伴ひ往く尚
以地の利と量人と欲る言上り時御伴あり
海軍集威

浅野但馬守長藏頭目今官不向ひあり御願
我ふ毎々新なる事れ小城中へ内意とくじやと
徳教に依り此も本陣とく今之の事よ此す
陸奥守政宗と以く浅野の後陣とくして仙波
と本陣の事乃陣と梅ノ撞木橋より向ふ下り
此下知あり 海軍集威

廿八日

大津新羅多村面より有津覽とて鉄炮とて
三百人遣りしれ款船可事方へ彼方打り款
弟お慈也 大津新羅山出被る事本支上野分
等被る人 劍業記考吳○海の集威○考名日記○故日記○款
右日記ハ本支野分正徳成林其ハ正成集威考方
在次福考新泰の比と進んて

於船場口堀尾山城を押入り款緊お防合給共三
入峯山城若葉也時人参り 劍業記考吳○海の集威○考名日記○故日記○款
右日記ハ本支野分正徳成林其ハ正成集威考方
此日往観しと云根と坊下町をら毎日二十
百人也 一日より百遠國軍小ハ倍と給し通陸

○海軍集威

此所の御願也
しつゝしつゝ

廿九日

石川徳輔主殿 攻取上佐社園日増次郎大吾河取

河取河取 御奉陪○劍書紀考多増長河取石川主殿次伯玉剛と主殿

志の丸○永井を名紀○あつた捨遺廿七と記○海子集候○少経記の

武徳大成記と云石川右兵衛人伝と奉陪河取

押初を伯玉剛八高田隼人ともあり井橋より

きひく〜旗炮を打け色ハ右徳の玄士支之徳と

養る今徳の拾初〜旗炮七の中ら右徳の叔

祖父大之保橋右徳也と云此ハ右徳の徳と云

り〜徳の徳と云徳士乃建と割止也也也

聞入す多〜徳入らん〜と云れ〜徳〜水徳

け色ハ波面を板なり〜と云れ〜徳換すハ小舟

浪事ありと云〜と云れ〜徳士平子平子徳

中選師と云村田九を徳大何内重右徳村田

新助徳井左次右徳一徳井七希と云と云七人

徳と徳の〜一書小波け色ハと云〜徳事あり

小舟と云ん〜人伝徳徳〜徳時徳徳と云徳

徳士徳甚五と云と云人松平と云徳士徳川

次徳と云〜と云小舟と云と云と云推也と云

徳川と云平子と云徳父子と云〜と云徳川則

平子主船と討取すあり討死す今も此の地あり
石川 廻りけしむ志統り志士志討めして多音と
切きり樽次郎り志中川右を渡り進み森
長左衛門彦田加兵衛の首級とせきり舟を少
志基おとす因甚き事曰友志信亦戦功あり志統
遂に志依守り陣と取 志大君の御進を志感
ありしを使し賜物ありし志統志と進み志統
よ入大筒打と志樽と打破る城の中より志統
とひひ〜敵〜志有る事 志若聞古志統り
志嘗〜して深〜すりと別止せられぬ〜

志乃成集集人〜と御付られ志進〜し志取〜し志野
但し志人志と志樽と〜し志〜し志ありけしむハ
志志引返けし志去又志志志志志志志打しけし
志野志志志加勢舟二十余艘〜して志ありし志
志志志志他の人志志志志志志志志志志志志
志野の舟の志志志志志志志志志志志志志志志志
乃敵〜ありし人志志志志志志志志志志志志志志
志志志志志志志志志志志志志志志志志志志志志志
志志志志志志志志志志志志志志志志志志志志志志
志志志志志志志志志志志志志志志志志志志志志志
志志志志志志志志志志志志志志志志志志志志志志
志志志志志志志志志志志志志志志志志志志志志志

元備其仙波と改取らむしより自燒して去と
 城中人引取しとして後方より赤鹿豊おる馬
 と地く仙波の云と引取し暗夜凄く深く
 後方赤鹿子の人あつた大とかけ焼立事ハ
 欲去死をり若多し是より城は六阿波程
 陣と取浅野長晟ハ人官く海く去と備
 廿日勅使来于任去く言 唐稻西 清平傳○赤鹿日記○
 ○劍書紀考夫○備子長成○永井長長記○の記
 松平忠房子 政宗 御目八氣候中野介事
 政の備

福吉備後と御目八氣先小園集人御目八
 竹中浮豆子為後足赤鹿自秀於於後也
 取通く我御覽中野介披露 政の備○備
 備傳り使と浮集院御陣宮く来く御傳
 色白と記すく 赤鹿日記○備
 と記○劍書紀考夫○備子長成○赤鹿日記
 山に駿河と御目八 政の備
 九鬼長つを向井物監舟人御免海進今船
 数艘取外中舟と知数船捨舟大備外入
 備○赤鹿日記○赤鹿日記

磯野組馬守馬口部領可陣取は被仰付別為所
使成衆集人系向 此の痛○海守集成衆集人磯野久吉
乃陣取成りその他ハ云々之類一平在野
田福守之趣は海守勢之接子云々之類之類○云々

増取河皮古池田南内侍高名一夫之姓名
古名紀伊河後若若令御腹陣領河皮古所従之
高名表甚ち又同族之信令徳廣津加古也表
長左衛門取首松平高月少所従侍高名若若死
後河後若令御腹賜 此の痛

今日戸川肥後守首三之将是福守と云海老江
村より城中へ福守と取去士也戸川軍と云
知り故より今日休云とい約一人吏多切於甲士三人
と討取と云なり 高名通浪○海守集衆○云々

世以上方大名若衆中へ老人質自一衆中或
お人成十人百奇被是伏人紀伊國磯野組馬
守布 一十二人被取 剣書紀考云○若若死

水野日向守勝成永井右左衛門忠勝堀丹後守
重吉山内守計政重以廻人云々福守之赴
海 其々その他の被益と云々 若若死
松平左衛門若若令格と被城中より大砲と
放しと取乃降云々 古徳院殿是と云々

決乃指と大焼く、船、即此指と以指のよととを塞
て急之改警城を焼す、て指と自焼く、七月初日
記○武
治成化三年八月廿一日

宇波ふ家説云、治成化三年、東房旧好の浪士あ百
七十八人、群集し、上種より違す、如去り、動り、軍
七百八、乃月俸と賜り、且、古徳云、東房、
侍く、守る大坂城、中、清公、入乃財法、今廿九日

古徳云、躬を、と遂行し、海子集成

今夜敵自焼他波、所年唐○永井を長元○そ長日○取日○
創事記考卷十八日一夜一説亦ある、信記

毎日

自昨夜、お今、新大坂、正色、焼亡、治地、音頻、
午候、是、敵、放火、他波、町、大、満、所、焼、立、之、子
流、傳、と、忠、大、天、満、他、波、入、城、中、云、致、鉄、炮、於、城、中
逃、入、在、多、上、野、介、成、衆、集、人、其、友、常、力、永、井、古、を
為、物、人、件、不、毛、申、別、所、系、西の篇○海の集

福、為、備、後、与、正、勝、色、利、長、つ、与、秀、統、の、丈、率
と、以、之、善、井、悦、と、榮、切、入、子、分、私、平、主、成、利
行、相、足、身、之、命、と、り、是、是、日、得、志、氣、後、与、大、政
世、之、痛、む、と、言、ふ、今、之、事、物、と、成、す、
⑤、今日、から、改、と、云、く、て、急、後、と、勵、し、怒、り、と

如ふく右の山所結及 海の集威

十二月

自平野本多佐治と云井大炊介来出所前
碧野密後今日仙居を去り少所國人藤山上人
自念良来所宗出皆海土宗方所難後日野
唯心金地院伺候 西の路

松平武敏与利隆因在馬の勢也此有る云云

以豊氏秀右と云又本今日辰刻別若川と傳

天徳の地不形入るて而くよ放中云々 赤石見

成化のとき名りれ○その元通照○その元捨道○改○修入土橋川に於て

天満所進と云々 自所前出所天徳所進

智く兼也此村傳云天満所進地初と云々

上野介人数地向く我狀と云及送所 その元捨道

大工中井大和と云々 東比日小茶向山

御陣と云と移り乃仙波乃高来子懐て早走

下管と云と云 其元通照○傳○其或差向山所而仙の
非傳と云とられ及云山所而後其法也
其元捨道

陳和定らと云と十月廿二日○改○修

仙波に橋自城中燒絶高來橋を殘し其

橋為燒如石川之原介進而於此而法地迫合

甚急也此と云云平佐久乃向内と云云

被を被止し雖も我亦停永井右平云至處分
小僧也加僧下被をよ作日若果急恐進
之世務欲能携雖燒多何更式欲不可難欲其
不可然也加凡甚千希為軍使馳系之出不知
為責外小迫合我堅停止し之也仰書武注大願
山加凡民欲書之船と所使し之我之止先ん水也記○
不元存造○不元凡九月廿九日○劍業記考文土月廿八日記十三日
と記○海○集威○使○不元信○集威○日

増次等河波より所馬喰、園少く討取首
二級と然し池田高内少捕り、平子主膳久治
、首と兼捕右とよ托と然るを知る、神若と兼
乃使篇より若草令十女と賜ふ、海○集威

二日

巡り茶鷹山、大樹自平野出而得く、
○永井、茶鷹山○不元通造○不元日記○海○集威
御年傳○卷六日
記○劍業記考文

政事録云、大津市渡河茶田心来也日
可有御勤事、比所自世知唯一騎越城也
今御覽欲し辨給、將軍政被下、平野
同初給、不元信、後与同、上野今、城、集、集、書、石
節、力、同、為、所、供、自、余、不、多、申、利、還、所
大津市、株、住、吉、より、茶、鷹、山、所、威、出、し、城、乃

板崩をいふ事此の如く也敵大筒と奮戦ハ
銃砲を射つは例に及ばず制するに
進みぬ成程女友も多し御馬も取付を制
止する 大所を極大音とて運ハ天ふあり死
生命ありと仰りて説人ありし果力なく
御前へ進みぬ事とて後とて横国甚右馬
乃て不覺り仙場表城中より大筒發射
舟を速方乃て花わつりぬとて
此の如く仰りてしる事 大所を極大音とて
則仙場へ御成程横国一旦ハ謀りて横國を

除きりたりあり
たふえ給退の御の事横國の如く取
捨地とて除くは女友信右の如く
よくと異なり

武徳大成記云 神皇自任波花陣と題す
武子伊達政宗おお後石川忠信の陣ありと
とてをたふす時中法に旧長共二河より
若多ありあれハ信所詞をむい方とらハ
小出大和と右英國牙信所信右を就不御付
曝布御乃地と案ハ先事致信来ハ使あり
○信の事或同ハ女友信右の如く取捨地とて除くは女友信右の如くよくと異なり
右所を極大音とて運ハ天ふあり死
生命ありと仰りて説人ありし果力なく
御前へ進みぬ事とて後とて横國甚右馬

勝利と云ふは、士卒と云ふは、死にたはる人
我々の先を争ひし者も死にたはる人
勝利と云ふは、士卒と云ふは、死にたはる人
謀と好士卒と云ふは、勝利と云ふは、死にたはる人
乃と止、我々先勝也

南越信使より利由御目見えと云ふに依り、御目見え
汝と云ふは、人我自國元御事と云ふは、野原野原
長則御目見え又方と云ふは、御目見えと云ふは、御
被領六万石、御日向國被領御事と云ふは、野原野原
長谷川に在り、御目見えと云ふは、御目見え

三日

秀右様へ白奉野原互陣 村柳之書

不変上野介正徳公 命して、御事御陣と
天満の候より、御事御陣と云ふは、御目見えと云ふは、御
左馬の書右様、御事御陣と云ふは、御目見えと云ふは、御
御事御陣と云ふは、御目見えと云ふは、御目見え
此今より、御事御陣と云ふは、御目見えと云ふは、御
町或ハ二町奉へ、御事御陣と云ふは、御目見えと云ふは、御
味方より、御事御陣と云ふは、御目見えと云ふは、御目見え

御事御陣と云ふは、御目見えと云ふは、御目見え

世女織田有糸、返籠不多正純、許し、東原
正純、御前、於く是と披く、教田秀頼、正純と
いく、と敢く許さず、と、正純、信長、正と
か、より頼、ハ有糸、城外、より、交和、を、候、す、く、
乃、方、と、有、糸、正、純、し、云、を、の、泰中日記○海
見紀○孝元通世○

七日

朝霧大獲、越前加賀佐和山、克降、玉城、而、人、城
車、欲、入、く、と、于、壁、下、城、を、發、銃、炮、拒、く、若、者、乃、死
と、多、く、三、國、く、物、共、命、日、令、未、下、莫、得、く、帰、來、

于陣、管、放、右、軍、退、御年譜○泰中日記○武徳寺、戦、紀○劍
業、紀、秀、長、ハ、敵、將、の、外、ハ、少、ク、者、ナ、リ、と、進、入、
と、て、馳、奔、い、ハ、化、○、若、者、乃、死、○、若、者、乃、死、○、故、り、死、

政事、添、云、今、於、越、前、少、將、殿、而、後、本、方、待、臣、与
同、次、而、更、以、銃、炮、与、敵、迫、合、如、少、將、殿、軍、勢
登、城、城、已、欲、被、時、敵、大、將、突、若、固、く、若、者、討
死、者、百、余、軍、監、馳、奔、世、中、上、見、遣、安、藤
常、力、於、危、下、門、取、方、以、作、毛、井、停、揚、敵、軍、勢
登、壁、進、敵、大、將、突、退、奔、白、旗、百、餘、○、福、高、之、云、
人、數、以、千、餘、

同日、上、与、大、將、登、茶、磨、山、而、巡、見、御年譜○劍業紀
考、大、○、武、徳、寺、戰、紀

○新あり記○改り編

廿日

八獨自平野移陣於惣山

御車渡○新あり記

とる丸○改り編 御車渡自平野移陣惣山 御車渡 御車渡 御車渡
○新あり記○改り編 ○村越史書 ○永井老名記 ○寺之通燈 ○大岩記
○院士家渡 ○改り記

武徳大成記云

神若

古徳院殿茶磨

よららとむの信言と述ふとむの信ありと

古徳院殿乃御陣官と号しと移すとむと

世役小 神若爲徳陣と述ぶと述ぶ中

後旭と改つとむのときと然ると家小御座と

とむのとむのとむのとむのと

○新あり記○改り記

御車渡
院士家渡

古野真山中惣野心史書乃不御車首少

奈一換致心巻と也之御車固と作候と也代友

丁取人變り被作か大坂善味と者事如在奈

良名丁御取とらと御取中坊左之小通遠とら

事と 西の麻○大の急務遠○改り記

世中善徳百あり陣隔表自今善徳取止是八

於長門の故国入京車御車とるの急と丁被取候

との二史りしと

御書記考六○新あり記○改り記

至夏に坂を考へて了成就也吾人不知
又或謂及之入水と聞留りて之を也
考之○
又或謂及之入水と聞留りて之を也
考之○
又或謂及之入水と聞留りて之を也
考之○

大河亦稱曰河陣者下考之河陣也
考之陣而之別於河陣也河陣也
永井右近守西尾豊後守板倉月隆河秋元
祖馬右松平右馬守等以之為人是祖也
也考之免於也

此自河也侵者之河殘在今夜より成子富
之別ハ意考之河陣也河陣也河陣也

三別ハ大筒と打陣中流と之を考之河陣也
考之免於也

林平遠江之藤勝陣天王寺小初也
考之免於也

松平有少補陣次河彼考之河陣也
考之免於也

築竹把持考之河陣也河彼考之河陣也
考之免於也

作會 考之河
九鬼長門考之河陣也河彼考之河陣也
考之免於也

更今度考之河陣也河彼考之河陣也
考之免於也

西井左馬(附) 解松平申安の事 仙石去放少 亦亦御前
海

六条中御公方 廣次泉中御公方 備山科宰相

自京致忘 今日御目見 政○海

政宗使忘 山島志摩守 未御給地形 度由云

上御古使忘 大矢二挺 亦亦平目玉 大角

三十挺 借給松平右馬 大矢二筋 約事御前

中云 是乃大梯 花可造也 飛色 江町 御事 取令

御 政○海

信因甚在由 圓高權左馬 赴仙使 天滿海云

御復赴進 先子 孫炮志 雜一人 可甚惜 夏也

能く 上手 提亦 前至 而責 亦 平子 負支 友肝

要く 各中 海而 法人 候 男 政○海 幸元 通摩

信物と 石く 命を たら ぬ事 八 徳軍 の 士 幸 ち 孫 炮 の 里 候 中

居 事 一 人 少 く も 手 負 死 人 あり 八 あり 候 事 借 事 候 事 あり

信 候 竹 末 と 固 く 提 防 と 候 事 人 の 候 事 候 事 候 事 候 事 候 事

作 あり け せ 八 信 物 大 ち 候 事 候 事 候 事 候 事 候 事 候 事

今 夜 石 川 彼 前 入 及 宗 林 御 目 見 然 御 相 候

自 是 山 島 軍 政 為 御 使 古 井 大 候 介 事 上 自

城 中 御 相 候 事 候 事 候 事 候 事 候 事 候 事 候 事 候 事 候 事

下 知 外 方 候 事 候 事 候 事 候 事 候 事 候 事 候 事 候 事 候 事

馳集于此不惑如昔秘之誠如何不致于作云
最 大樹沖憤之理方とく其小欲とんく
不可侮と云々之と不圖勝謂良如支方此下
知通可始者再三被斥合亡丹大能以師系于
是心右と通上と 幕下作云 大所而文武
之道天下を以て誰か大為世及と安何忽徳終
支奇憤とく所氣色も使于時在支依後与
か所若所憤誰か所最完 大所而此下知合隨
河下此也達てしと

六日

自任在移陣於茶磨心 河平磨○茶磨心○永井左衛門
○茶元通世○村柳之○徳士軍

改事録云茶向山渡河供奉不忌戎衣

為軍使自是心入河在河對談為堂和泉も在支

依後与候河並

我任大成記云 神若河陣場と茶磨心

移さるる也と云々傳信以下悉く禮と忌を

神若只一騎在河ありて城外の宿陣と巡視

し神若傳信等も此に馳之候に在り

右傳院殿園下則河馬と馳之候に於て四音

乃陣柵を巡らんし玉ふ天満川乃柵外へ御也
あてて馬を停先城と乃形格と清見あり
けあし尾垣乃死士とんくきく人よ此と
おまい城中より銃炮と放らるれ若清才へ
おすうと中より清馬の前へおあり歩卒銃
炮の中り死すものとんく徳人神妙なるものと
やあ。○海軍軍醫上

七日

今既古井大竹氏自長山を河侵系志者河
密後成隊集人あ若常力日射るさ今日わ
中あく歌お菴山知よ今日左馬の徳人救押を
中より射ハる者了城へ引取跡を残りしん
少く左馬の徳人多く討取しん者長りた
及若昏ふまお雲ち江旁次方被作付知お雲ち
曰我陣不天満表と川深教尋あ責い別我
陣場容易難あは言上清氣色も使

八日

大洞新より上言徳大各へ銀子百両目下被中
友雲和泉ものしハ二百両目被下をハ去此

云根一〇衣進工云云故々云云徳代元々ハ
不徳下上方面真元云云也 劉華紀考云〇若長
日元〇若元裕建十元
〇海子集

松平武敏与同左馬侍服被使所与出清前
本多依海与云并大炊政成雲和泉与出清前
智所難使依久与右馬侍同深云清目人云元
借所目人令地院事云云 改〇編

淺野但子与松平云依与同令与古介出也前
上野介下云所但子与陈而自城中生田
宗右衛門大夫傳所前云云也云根为小舟供因

編元云是水介令及善備種云清和院出果元
惟中徳浪人同公云被因云清被城中云也
出云云 改〇編〇改〇見

淺野兼如云清目人堺傳商人并長湯地不
々々進和之持長谷川左云也云云 改〇編

菊亭少右衛門對面云進清村城 改〇編

自城中織田有系大野修理返状云云上野介
後友云云密々被爲与云使村田吉元大野

修理使兼村権右衛門也 改〇編〇嘉永九年十月一日〇云
元通禮目云〇若長日元云〇海子集
成用上〇改〇見〇武健大成記見云云云云

松平内膳より在後市橋下流も長勝の天満川
乃後深と鐵人為初申し之堤土とをり之踏
と遊りも大故徳郭乃橋際く標示と建也
軍監か之民初か補直澄服初橋を更改之修
不在海言上して市橋河感と為る 海軍集

九日

中將既成是命停奉大改以改修築堤使長良川水
石入城塙也 御年譜○参り日九○永井本君記○創事紀考天二反

武佐大成記と 祐君初より中將の舟が
でハ渡りしと云ふと夏五ふ停去出地後ちら改上

石世河流と寒ぬが海と松ありんうと此ハを改上
右改上流と雲うハ水忽ちあり乾下と
けきハ別ち改小作りれをありと初考後後と
正勝毛利長のも秀統う人元と改し角舎事帝
の堤乃船数百艘と云ふ石と運く之と流と塞
り行本と海く堰とと此と築く九日よふ
ちより一丈八尺厚了十丈乃堤成就と云
より長柄川少く流さく堤下よそ水流乾
大道とがより修束自也と云ふ事也ハ城内
肝と消し ○参り考天
○参り考天 ○海軍集八月廿○参り日九○創

入夜一時發砲放之鉄炮揚閣劫城去
師年傳○桑名日記○創業元
考夫面之宣三時法手乃鉄炮上揚之放入懸波上揚と云ふ也○海軍
或印上のり海軍も傍中と云ふて此の如く之の如く之の如く之の如く
○幸元通進今夜も毎夜二三交つて之の如く○永井長右衛門○桑名元
○海軍

友雲和泉も本清常為責所伴定有山代内

滝川豊前も今日長柄堤築立河水急流

入尾崎初天滿川甚浅之日可就援中海軍

寺本氏放少書状集上野分披露海軍

今日自他同之進董初一包南光坊持来海軍

石越前原先山内段少着戎衣如所着責口

陳馬は作付海軍

今又法親揚閣多鉄炮連放一時余恰如夜雷
打紙悪且甚多之可怖也海軍

十日

午刻將軍隊入所友雲和泉も本多佐治も来

軍和泉系初之所相候海軍

今日毛利定瑞所目人甚長のり所懸切赤

多以上野今中上吉川夜亦出所海軍

京町人然松介海軍

此以迄も之は秀一築山之指大角と松橋（打入

城中及迷惑人々有り創業元考桑名○武徳堂日記○桑
名日記○坂見

松平上総守船場へ後倭小陣とありて多敷居居て大浦
陣へ後倭小陣取拂系遠くは多敷居居て同豊
後寺河七上元丸の後倭へ陣取景勝後倭小
伝吉野小松平丹波寺牧野駿河寺陣取船場へ
枝本町寺も百子今枝本寺へ是を以竹末寺に用
今日山と築城へ法袍と可打りし 大原寺
と説きしに福作寺 創業は孝安の末長丸の海軍集威今云
の末長丸の海軍松平寺ありて新長寺と云ふは
元化月十日
島津陰謀あり人殺し平へ國と事とくくとも

二日路多し三海路順風至し途中途申る延引
島津ふしは前ハ長長城申る田中流後如友

肥後小陣とありしは行月二人今、宮内陣大

浦口武作にハ取たりけりハ善く子と友板と友

板竹末寺付 長長丸丸の創書は孝安

今夜城中法方おに姓名夫又寺寄ありて是ハ

今、延雅如世も欲致深系と意可救先 海軍集威

十一日

友雲和泉寺出陣前寺密談 海軍集威

伊豆山松指山三島神社信神寺寺新巻敷

山野松栢院并昌塚清目ん本願寺使志下る

少進法平然小原風一政宗出陣前 海軍集威

又とと老海味言さすし女子嫌やこもくそふ
 石見魚さひお極山依し清成敗も如也世衣元ハ
 祖文江法舟とて福島左衛門と又も也牧野伊年と
 中老と也田ニ左衛門と云 森藤様へ進上お福福
 世法舟と進上也おく関く交り関ありともと後
 今風出也 村越之云
 今日自誠中し書系所理書未於御元後友サナ
 密懐し 西中孫○海子集

十三日

中井大和と古色お取し時福保よのをばる福子
 教百下造与し何月 三日三夜は六七百おあるか
 一人に予子あかかへんとも作也 又
 城と曜乃古依の支亦と儀野但るもし内古依と
 上と作付 交え於道○因の福小ハ中野但るも松平古依る仙彼
 堀川目晴再以舟橋下へはるるも作付と記○そのえ通世
 ○海子集成○武注大興元日と記

大津市下福乃夜色人ともと考く其○福集の
 復ありともくとも商人出光あり依り商人群
 集しともくともふもと磨ふ命もわちのり戦場
 向しも福人女城乃為なり陳中し金銀たす
 てハ商人事とゆめともかくとも磨軍法大い
 るかなりし福りともかくとも磨 其のえ務遠

公井大炊頭自是山系今日因西游御機極人々
同也 西の條

十四日

自是山 幕下湯使板倉月房と來今日西凡
御機極事河為西見也也 西の條

今日阿茶法乃自京天皇と茶向山系友堂

和泉寺於所氣物乃所難後 西の條 ○創書に考ふ○海
系成○茶元通體○系元後後

東右日記云阿茶の乃海より海帯と院とて

和泉寺と院とて先玉の之を為なり

友堂和泉寺の東北國元は亦入合書 創書に考ふ○系
元後後○系元後後

○武徳天皇記りと云ふ

流子乃築山より砂屋乃松掃と虫り 汚地と

打掃く故年直少くも 創書に考ふ○系元後後

堺政不業山小去掃定好の職と先許とら系 西の條

集

南動信徳寺出所和就董陰是南動知り葉

木林寺もも安友寺乃和安法中掃所 西の條

十五日

穿和殿中掃殿系也 西の條

今夕安友寺乃自是山系上 西の條

法地派陈老数千人越友堂和泉寺越前少部集

之改口以小苗大角试矢校了槽东下并

13年 松平右卫门被俘付牧野清之坊福屋之内

同越 内之坊○寺之通灌○松平右卫门作

海之集成云中井大和之造作之象石人夫乃

是格威物之松平右卫门支正德之监使也

养下抱渊乃妙子并上外纪正德福屋之内

牧野清之坊正成之坊南官天之主之福乃美子

御前之根乃改口之海前之友正成之心是音

素石之城中一火院之發之槽堀之壕也

已列 为平家自是正波清宰相及中御殿

同美和之友佐治了同上野介友家和泉寺

伺候阿茶乃公清也 白河之智方所密後

内之坊

松平丹波了同周防了加茂武敏少清目人

南光坊令地院方八条高智仁就主依人殿

邦清就主二条殿昭实使主御前右被献

色酒菓令地院寺之西尾丹波了被献

仁和寺美妙法院云梳井云寺蓮院使云

武家名被進酒菓候南於清浄院御目人系於
高基と御目人秋密林 西ノ橋

今夕今井定重持事石大矢玉宅六六百目
自城中政宗陣場へ討て今夕於之自侍丹衣
と申自是心持事大玉宅六自城中片相事心
陣布打かき六百中自但務也 西ノ橋

本夜第日中今井侍抄取介喉痛賜御茶 西ノ橋
今日夜 上橋御陣布より事お二挺城へ入
翌日六日 西ノ橋

城云夜被發候御目人 河波ノ陣 御軍傍○御目人

○城目人 ○今夕今井定重○今夕今井定重○今夕今井定重○今夕今井定重

本夜日比云夜入大城の今大野と申御目人
重右衛門府長是島お木増候御目人
陣と被發云夜後云中村右と是と殺く死
相田修理進と今と相田九郎と相田九郎と
若田七左衛門村和と進く成功あり増候御目人
本夜日比云夜入大城の今大野と申御目人
横井十左衛門御目人七左衛門村和と進く成功あり増候御目人

○武家名被進酒菓候南於清浄院御目人系於
高基と御目人秋密林 西ノ橋

十七日

博依野河波子使と系今賦歌と博坊強右馬
 右本野河波子陣右方被討知如今作中村
 右全討死と外廿余輩被府指國修理若國七
 左馬の鳥橋合港修理子九弟之指年千部と值打四取
 捕首又新洞七弟在馬の四馬身之指橋井千弟之指
 三人被六騎討取也言上因之被悉板倉内所正
 合岡合平到河波子如河右作云被討也思
 知子捕之と福田修理文子治感状被下中多
 然願河感河波子治感状と下中多今又棟多
 河馬口馬剛被及捕利於他波表如被討如如

合港首捕と被跡宗一人被着野思也此在平
 建初傳内也福田修理文子治感状被下中多
 上野舟等と福田文子治感状と外中多宗名
 賜赤服甚令と口首剛と手合宗表甚令吏員
 及之指廣橋初左馬の以上十人甚令赤服被及
 以之指○海子無成候使とと上宗又市とをハス水也記板倉内原
 少使とととと記○宗名も記○宗名も通原○改り也
 剣業記考矣と云世時修理文子九弟合指并若田
 七左馬の才也名 与所下と河感状と下
 河波子と一目 將軍家河感状表松平氏と
 被下の中平陣亂旋と後北獨信路國葉乃軍森

新松平氏之賜つゝ八四年二月の上也

昨夜乃我功と獲とられ増次等差居居成候
と賜。

此十二日一夜に於て彼に彼に敵を執
制するに及ぶも亦以下眼の中を故に
別時にお合誦するに其に討捕等全に
實に感思するに委細に申すに依りて
也

十二月廿七

是處

此處より此の事は於て是の首領に
世所書 大所下より賜りて此の事

集候に 右佐より賜りて此の事

我前より及河目見んは多し野介と申すに於て

作と請願人 將軍家河目見んと申すに於て

陳傷は方々候事被後所覺暫時方所新候
の事

為初使廣橋大納言に系大納言被系是ハ

天の時分迄軍に被作付 大納言に及

可有歎且若和陸に我の被作放込内迄勅定

と日野入る唯公令他院上 大納言に

迄軍根下下旨致立陣也和陸に我不可

若し假別轉天子命甚以不可也勅答有

請。或は往成紀の海に集候

加茂肥後守誠八代密相入箱冥乐茂彼心智院
御見入の痛

今日 為軍使以水野野監物福留為月夜行
陣場高安石大矢敷挺合討也の痛

十八日

序相且乞の云京橋に海ありの秀村十八日ハ
豊國明神乃祠の毎月奉信のど如きりこ
な水ハ十八日ハ田付云座了大石大矢と發
しつとけ色ハ雷轟乃りしとて海ありの時
後及城外乃云とんんとてまゝとらぬ

け家ハ石大矢乃云三目乃柱と新あり
居者ハ女二人忽形のしとて碎夫けは城中
苦也事。武徳大成記の海軍集

常寺院京極若枝とらとる陣管とまら多
正純阿茶と為奉令とて和贈と後と常寺院
城中と入ふ武徳大成記の海軍集
武徳大成記の海軍集
武徳大成記の海軍集

今夕水野野監物自是心為御使京極連關白
自 大津不被進衛の痛

其及對するに信河院築新幸芳とら被

約成和秀頼出陣

織田武藏守永長 御年傳○創事紀考卷十
大野信徳守旅徳 九日一説、廿日と凡○永井

一、永井

秀頼自死と秀頼使として常高院二位の
与密庭の局二人城中より出御官中、朱
呂腹三領、辰子二十卷と然るに支心純阿茶為
是と披露を以日織田武藏守有系大野信徳守
御年傳 二人暫とて秀頼を以て使
二人と申支心純小預守也 海ふ大野信徳守
御年傳 和徳國へ後 ○永井通澄 ○永井裕選 ○海軍無成
改事備へて今既送城中一人暫とて常高院

信三郎秀頼守系向中支上野介藤光寺田物置
是副修理守系向是捕集修治子幼稚童出
少二帝念く幼子可出方とて移列御大野
信徳守十七 守系幼織田武藏守十九 出右に
後友三郎言ふ不捕幼稚童其所感 ○武徳
年集成 ○海

今於大坂迄と場所く、永井守子も場所く
系信親親と死骸在と守人尋中、梅田三六

廿一日

安房守力成能年人、永井右左と支心、

法多乃仁天と申す小引取し本元通隆○海

松平下流と申す本元通隆と申す政令と申す

康定通川豊前守依久乃河内守山本新左衛門尉

伊左衛門左兵衛次右衛門尉永田右衛門尉

為希作左 左衛門守と申す人政城の場と申す

江門と申す馬として軍勢乃根新と申す海老乃

馬と申す○号と申す通隆伊左衛門守と申す

九段乃軍勢守と申す守と申す

日比上野守乃伊左衛門守と申す

廿二日

和賚已成盟と以書御年傍

剣業化考と申す云和儀お調と信く秀新和書と

をら公より板倉内膳 為軍政より所領の中

和儀お調と信く秀新和書と

板倉内膳と申す和野守と申す

大和守より板倉内膳と申す

和儀お調と信く秀新和書と

長つと申す茶屋の所領と申す

永井守と申す和野守と申す

村被と申す和野守と申す

一 對 河内市様款仕る後り

一 今度浪人古系し外抱至るあり

一 大坂城の城下り

附大坂城の城下り外矢金多の城打者なり

右三ヶ条也

河内市様河内市村長の款仕る也此

摺り合ふなり

一 花浪人との何方に居るに構はるなり

一 大坂城の城下り大関と伴ふなり城地

知り合ふなり

一 何方に居るに構はるなり大関と伴ふなり

知り合ふなり

右三ヶ条也

廿三日

今迄去鹽土城壁及埋場河内市様○武徳寺殿記○永井寺殿記○

剣業死考美と云城し條と鹽ら場と埋場なり

彼御村の文上野介をとり又云大坂城

三ヶ九搦搦被却又云一統公河上流の後二

三ヶ九被却をり

編り集り成り三ヶ九被却の監使渡りなり

徳山田十左衛門 西公乃史平と獲之城方
今度官捕と一彩郭より破壊すくくく
南方平野通八町目と二節乃場と埋先跡七
手と崩して忽ち切と終る言に於城亦如矣
彦根の二隊と始迄の言者らくく史平と
おしと雲雲のくくくくくくくくくくく
十二俵と運ひ鳴と叫と埋とくくくくくく
埋とくくくくくくくくくくくくくくく
海子跡なり

廿二日

黎の茶麩心乃陣營の六軒焼失也 黎君日記の改
の痛々歎死
今如 物軍表渡河暫くは相後海原以後
不支往後と云井大物以公所亦成 海の海子集
成
有糸渡理献沖腹織田武徳と因り人野
信流と右因系極お校と右沖荒者系志
十位入敷居く月渡理と相織袴者外不支
佐海と友雲和泉と候沖荒河原投 海の海子
注大成記の
海子集成の事なり此の事乃有湯と云記の事元於是因と○事元
通世
東西と流大石各掲くくく和儀と誓と 武徳と成
記○事元
拾遺の事と云くくく記の事元通世の海子集成

改革録、云已別記其在所見之官物松平為
福考、後考、淺野但、与、鶴岡、信、徳、与、細川
内、礼、寺、氏、志、摩、与、松、平、武、將、与、同、友、直、國、將、松、平
高、自、少、壯、右、左、方、与、之、若、武、將、福、重、長、六、兵、衛、尉
丹、後、与、松、平、与、信、与、堀、尾、之、城、与、加、友、武、將、少、將
南、前、信、徳、与、毛利、長、与、同、甲、斐、与、陪、臣
吉、川、福、永、越、前、少、將、同、令、方、伴、与、与、松、平
本、房、与、林、永、遠、以、与、本、多、右、衛、尉、与、中、右、衛、尉、与
松、平、下、法、与、本、多、普、信、与、松、平、主、殿、并、松、平
日向、与、南、光、坊、傳、長、光、出、御、前、西、雜、使、

具

大、神、君、壇、御、受、主、信、与、右、之、軍、功、之、褒、と、ら、れ
次、之、御、信、与、本、房、与、と、御、前、下、福、田、宗、人
林、氏、感、与、人、若、其、令、百、兩、之、賜、の、松、田、徳、兵、衛、尉
御、賜、物、主、之、御、感、事、与、副、之、賜、の、御、理、亮、与、
久、希、与、御、付、了、御、賜、物、主、之、御、感、事、与、副、之、賜、
山、田、織、部、介、榎、口、内、丸、御、前、主、殿、与、右、衛、尉、若、田
七、右、衛、尉、与、右、衛、尉、主、殿、与、右、衛、尉、主、殿、与、亦、表
甚、矣、御、感、事、与、其、後、之、賜、の、一、福、と、表、す、
い、か、ん、す、
於、大、坂、御、儀、表、揚、御、受、阿、波、与、子、之、珍、夜
切、切、之、云、文、進、令、即、進、為、欲、利、被、之、禮、宗

今度於大坂捕首之糸務曾之至
所感之思言也

十二月廿四日

今度於大坂捕首之糸務曾之至
所感之思言也

十二月廿四日

十二月廿四日

今度於大坂捕首之糸務曾之至
所感之思言也

十二月廿四日

十二月廿四日

今度於大坂捕首之糸務曾之至
所感之思言也

十二月廿四日

十二月廿四日

今度於大坂捕首之糸務曾之至
所感之思言也

十二月廿四日

十二月廿四日

今度於上取長禱多禱賜新骨と糸
阿波と糸 二つと禱感と糸也

三月廿四日

山田織物店より
と度於仙波表増信を阿波と糸と珍夜
切おと知錢合則進最欲と糸新骨と
公禱感と糸也

十二月廿五日

志田七右衛門

松平五月廿四日補う長横川次多筆浦た近

有人小禱感書と賜り
成○舊物信所付と高七と城
言内か補うお侍の事と記す此の事か於近付

公井大徳正出所元江州佐和山井伊掃部左衛門

幕下評領と書言上
西の届○書しおれい元和元年二月
のとき此の成記元和元年正月と記

井伊掃部左衛門と名と賜り佐和山

掃部

井伊玄祐少輔左勝 將軍家乃侍と書りおの

石領乃うりを口之地とハ才由考小田ぼり

上野國小引新と其中此城小すし
白ハ三万石
と領す

業と改り徳考長十九年十二月廿四日
將軍家由考よは
乃味と改りしありおたは進加よえ元元年二月

大津市重考の遺存ありてその作ありと
しと思ふ所の所の記を亦あやむる處あり
以南光坊山有る也山重忠別院云也故先年朱
長沖朝也 此の所○海○集○成○た○た○た○

長谷川左と信可も堺政所は自若山被修す

被長公女と野介被修 此の所○海○集○成○た○た○た○

廿六日

出奈意心入洛 此の所○海○集○成○た○た○た○

○永井先考記 此の所○海○集○成○た○た○た○

村越是上も廿六日一人被修之

徳傳八廿六日初中

故若く之懐てふ如く廿六日支別村

計て茶意心入洛思ふ人坂城中

常く湯野野へ出立て人取所鉄炮

沖弓一長射し所徳也沖長刀一振

此張也茶意心入り玉造ふ心

三ノ郭と月とちと沖通ふ心

ふりて昔人相あおちふた

ふりて故心は長古と平信

物と二条沖と被修也

大坂城被平し乃 將軍家宰相及中將殿左近

左近上野介成康集人女友市日同留茶白心通

通 卷之五 後之の陣 卷之六 乃の事あり

今日有示大野修理七組以系心 將軍家

御目通 卷之六 乃の事あり 卷之七 乃の事あり

廿六日

侍長老出所前入々及上侍身記諸事し百旧夏花

古事紀文徳定孫二代定孫孫江次牙明月記續

不致文釋及在文集西高記新日本記内裡式

山槐記類聚二代格等々然々乃美因何候

孫○海○集○成

今夕片相市正出所前板合侍等々何候方由難談

廓山出所前智方佛法難談 孫○海○集○成

廿七日

自 將軍家去并大坂城目志心系二条城也

所前熱地槽懐平々乃去上信上名今度因

左陣若房公及重徳之字年所殺先々也彼等

孫○海○集○成 ○武徳大成記御傳乃と才と

今多次第事定然生籍所料理有 孫○海○集○成

廿八日

系内

神皇正統記の創者たる天皇の系内

武徳天皇成化元年 神皇正統記の系内

神皇正統記の系内 神皇正統記の系内

神皇正統記の系内 神皇正統記の系内

神皇正統記の系内 神皇正統記の系内

神皇正統記の系内 神皇正統記の系内

神皇正統記の系内 神皇正統記の系内

神皇正統記の系内 神皇正統記の系内

神皇正統記の系内 神皇正統記の系内

神皇正統記の系内 神皇正統記の系内

神皇正統記の系内 神皇正統記の系内

神皇正統記の系内 神皇正統記の系内

神皇正統記の系内 神皇正統記の系内

神皇正統記の系内 神皇正統記の系内

神皇正統記の系内 神皇正統記の系内

神皇正統記の系内 神皇正統記の系内

神皇正統記の系内 神皇正統記の系内

神皇正統記の系内 神皇正統記の系内

神皇正統記の系内 神皇正統記の系内

神皇正統記の系内 神皇正統記の系内

二日しきるが海に海外西國は國の大名海と
日新の徳川に海軍を申のりたし案く使
おもてりし第一遠航をいひの旗越をきり
海軍のしきりしと云ふ 安永拾遺の武徳大成は東西の海軍の
海軍のしきりしと云ふ 日新の徳川に海軍を申のりたし案く使
口海軍のしきりしと云ふのりた

長弁たを自備親十叔亮と 西の海

小笠原を叔父捕秀の庶子久松松女はり
叙しを侍とす 佐徳の御律定を賜り
たれと稱す 海軍集

酒井儀成も大勝し下法園に於て赤地こ

石と賜り 海軍集の海軍集の海軍集の海軍集

有るは海軍儀成日向玉子於赤地二百三
ふふと賜り 海軍集の海軍集の海軍集

海軍儀成も大勝し下法園に於て赤地二百三
ふふと賜り 海軍集の海軍集の海軍集

なすはに懸河も 大津木の御使とす 海軍集の海軍集の海軍集

乃城に馳りて遂に赤地縣の城を梅を 創業

赤地縣人小笠原天正の法とす 海軍集の海軍集の海軍集

仍し... 凡俗... 依て... 命... 六月... 成敗...

廿九日

彦橋大納言友兼勝二條大納言友実條
 勅中依く二條へ来り筋念友佐の事七條
 と同じしをけは 神嘉父下新美ハ古今異同
 あり駿府小滞り律令格式と考へきて奏上

あり... 武佐大成元〇... 編〇...
 今日御行儀例のふし... 編〇...
 伊丹... 編〇武佐大成元〇編〇集成

富田信忠... 武佐大成元〇... 編〇...
 武佐大成元〇... 編〇...
 片桐市... 武佐大成元〇... 編〇...
 同主... 武佐大成元〇... 編〇...

廿月

石川之志取大坂乃軍功多小依之水
動氣之出也あり 萬福

月夜乃平政長子常力也興子列
一百七と授中らり。さるに當秋より左
政七八軍人た義の忠乃地房長能
ちり常力頻不難彼乃行不後らん
しと勝之信く政七黙止とあり
騎士共人歩卒百余人常力に附て登
けりつ依らんく之興不支能後より

授くより中披あせんしと願けし
正信肯つ以中興再三信く依て
達す如 神君集弱子乃壯富
在玉とんよ忠ひしとととと
松平丹波子康長ハ女酒井在
きもゆく康長ハ共く酒井の部
られあひ今既不恩賜及と
安藤信右進 正次信義野乃功
六百と加賜

廿年

如倍揚付与信盛河尾後祖由良と云ふ
茂堂より虎糧米一石と云々軍用と申す
茂船注

江戸御書傳の付 將軍家より茂堂より虎

舟糧初為候 下坂切又 二石虎記

人書但比加茂源世常正勝法袍單等後

同公廿六人正致あり 海の集

珍本をたぬつ本國三河加茂郡と云二百石

賜大上と云と云ふ 海の集

室町幕府の長堤川新若由つ親長入右道標

う子次帝右由つ親長由人小列了難波の候了

後ふ 海の集

廣戸半在由つ正主初と 右公一初後と 海

集成



本信越後の信盛ノ也後復其功ノ者
額奈ノ元根本一石石之也ノノ事ノ列ノ事
信盛

自ノ所喜信ノ附 將軍家ノ事ノ事
所願ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事

人吉但以カ友國ノ事ノ事ノ事ノ事
國ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事

所喜信ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事
事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事

事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事
事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事

事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事
事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事



